

---

# フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

神浄討魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

### 【Nコード】

N8326Y

### 【作者名】

神浄討魔

### 【あらすじ】

リアルで死んでしまった少年が名前を変え、姿を変え、そして火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等を操る滅竜魔導士になってフェアリーテイルに蘇る。そして、おなじみのキャラと大暴れします。多分…

## オリジナル主人公紹介

名前

ディオス・ドラグニル

名称

ディオス

年齢

現在16歳 FT加入の時は9歳

性別

男

好きなもの

ギルドの仲間

嫌いなもの

ギルドの仲間を傷つける者

(特に女子供を傷つける奴は絶対に許さない)

魔法

## 神の滅竜魔法

火、水、風、土、氷、雷、毒、天、光、闇

などいろいろな元素を操る最強の滅竜魔導士。

## プロローグ

起き…

「んー…」

起きて…

「むにゃ…もうちょっと寝かして…」

起きなさい！

バチコーン！

「へあっ!?!」

オレは何者かに叩かれて起き上った。

「あれ…?オレは…ここは…どこだ?」

オレは今、真つ暗闇の中に横になっていた。

「もうやっと起きたのね!」

とすぐ横に小さな子供…らしき者がいた。

背中には羽が生えている。

なるほど、これは夢の中なんだと思い、もうひと眠り

しようと思つた時、また叩かれた。

「痛いなあ…人の頭を太鼓みたいに叩かないでよ…」

少し涙目になりながら反論する。

「まったく、死人が寝るなんて聞いたことないわよ…」

はいはい…好きなだけおっしやつて…つて、え？

今なんて…言つた…オレが…死んだ？

「オ…オレは死んだ…のか？」

目の前にいる羽の生えた少女に聞くと

「そうですねよお〜」

とものすごく呑気のどけに答えた。

いやいや、そんな呑気に言われても…

その時、頭に痛みが走り、記憶の断片が見えてきた。

〜記憶の断片〜

11月24日…

オレは普段通りに身支度をし、家を出て

学校へと向かっていた…

通学路の途中、少し行き交う車の量が多い道路がある。

その道も普段通り、普通に歩いていた時…

「きゃーっ!」

突然、悲鳴が聞こえた。

ビックリして声のした方を向くと

小学生くらいの子供が道路にいるのが見えた。

野球をしているのか、どうやら落として道路まで転がった

ボールを取ろうとしているようだが、ここは交通量が少し多い所

車を見て、取るタイミングを計っているようだ。

そして、タイミングよく出てボールのところまで行き

ボールを取って、戻ろうとした時、足を絡ませてこけてしまった。

しかも、運悪く、車が来ており、ブレーキをかけても間に合わない所だった。

その時、オレは自分の意思とは関係なく動いていた。

道路に飛び出し、体当たりをして少年を道路脇まで吹っ飛ばした。

しかし、無情にも車はもうよけられないところまで迫っており

「(やべ・・・)」

と思った時には、視界が一回転した。

チラリと車の影が目映った時、意外と小さく感じた…。

そして…そのまま暗闇へと変わり、オレは地面に叩きつけられる

痛みすら感じないまま、闇へと放り込まれた。

～回想終わり～

そっだ、思い出した…。

縁起でもなく道路に飛び出したバカな少年を助けようと

オレも道路に飛び出たんだ…。

そして、そのまま車に吹っ飛ばされ、命を落とした…。



その時、勝手に口が開いていた。

「…オレが助けた少年…無事だったのかな…」

その問いに答える者がすぐ横にいた。

「ええ、あの子は無事よ。あの後、病院で検査を受けて、通常通り学校に行ったわ」

…そうか良かった…って

「おわっ！…！」

オレは後ずさりした。

まさか答える者がいるとは思わなかった。

「うわぁ…ひどいなそんな反応…あんまりだよ…」

少女は泣きだしてしまった。

あ~~~~~…こついうときなんて言ったらいいかわからない…

ので、適当に声をかけた。

「ごめんごめん！…まさか答えてくれる人いるとは思わなくて…その…」

オレって、やっぱバカか？

「うん！許す！」

許すんかい！

「あ、そういえば自己紹介してなかったね」

そういえば、そうだな。

「私の名前はリリス。見ての通り、天使の一人よ」

そして、羽をピクピクと動かした。

「天使！？初めて見た！」

棒読みで言った。

「エへへへ…」

鈍感なのか何なのか、笑みをこぼしたリリス。

よかった、気づかれてねえ。

そんな時、疑問が浮かんだ。

「じゃあ、リリス、聞きたいんだけどさ」

「ん？なあに？」

やべえ…意外と可愛い…じゃなくて！

「リリースは何でオレを起こしたんだ？」

当たり前前の疑問だ。死んだなら、そのまま閻魔の所  
行つて、天国か地獄に行く。

オレの場合、地獄かもな…だから、そんなんじゃない！

その時、リリースが答えた。

「あゝ。そういうことね。理由は…」

理由は…

「私の暇つぶしよー！」

「(ブツ)」

吹き出した。

「暇つぶしにだれかを蘇らせようと思つてたら、

偶然あなたが来たの。ここにね」

『「ここ」というのはおそらく冥界かなんかだろう。』

というか、暇つぶしでそんなことを思いつくアンタがすげえ…

「じゃあ、オレは生き返れるのか？」

期待が少しふくらんだ。

「うん、そうだよ。あ、だけど、現実世界は無理だよ。」

え…なんで…

「だって、あなたの死体はもう燃やされちゃってるもん」

なんですとーーーーー！？

燃やすの早！？…いや…もしかして…

「オレ…そんなに寝てたの…？」

恐る恐る聞いた。

「うん、現実世界だと1週間くらい」

ガーーーーー！

「って事は何！？オレはそんなに飯食ってなかったのか！？」

「言うところ、そこなのー！？」

ツッコまれた。

「寝ぼすけだし…食いしん坊だし…大丈夫かなあこの子…」

「ん？何か言った？」

「ううん、何も…」

なんかあやしい…が、それはさておき

本題へ…

「じゃあ、蘇らせるってどういうこと？」

「良い所に気づいてくれましたー！」

キューピーンっとこちらを振り向き指さすリリス。

「つまり、現実世界はもう無理だから、別世界へあなたを

蘇らせることにしたの。あなたの記憶もすべて新しくしてね」

なんですとー！？それはまたまた…

「だから、この中から行きたい世界を選んでね」

とリリスが地面…らしき所をたたくと3つほどの

選択肢のようなものが出た。

『ONE PIACE』

これはおなじみだ。

『BLEACH』

ふむふむ。

『FAIRYTAIL』

!!???

オレの指はすぐさま『FAIRYTAIL』の文字を押ししていた。

「選ぶの早っ!?!普通もつと考えない!?!」

リリスにまたツッコまれた。

ツッコまれ役だな。

「フェアリーテイルはオレ、リアルで好きだったんだよ。

漫画も全巻買ったし、アニメも全部見た…」

そつえば、最終回見れなかったな…。

つて、待てよ…フェアリーテイルの世界に行けば最終回とか

丸わかりなっちゃっじゃん!というか体験できちゃっじゃん!…!

「とりあえず、フェアリーテイルでいいんだね」

「おっ!」

「はい、了解。じゃあ、次は名前を決めようか」と、また地面らしき所を叩いたリリース。

また文字が浮かんできた。

『ライ』

『シュウ』

『ディオス』

迷わずディオスを押した。

「だから、選ぶのはよ」「うるさい」「…」

ツツコみを途中で止めさせた。

「ディオスって、響き良いじゃん。だからコレ」

理由を述べた。

「今から、オレはディオス・ドラグニルだ！」

「え！？なんでドラグニル付いてんの！？」

「ナツとオレは兄弟ってことにしたかったから」

「なるほどですね」

おい、口調おかしくなってるぞ。

「では、ナツさんとは双子の兄ってことにしておきましょう」

おお、助かるぜ…。

「顔はナツさんとほとんど同じ、髪形も同じで色は何色がいいですか？」

「黒」

ただ単にブラックが好きなだけ。

「はい、完了!…これ鏡です」

と鏡をくれた。どっから出した!?

鏡の中の自分を見ると、一瞬ナツに見間違えた。

それほどよく似ていた。髪色さえ違わなければ、

ナツと全く一緒だ。

「では、服装なども一緒にしますか？」

「ああ。あ、マフラーの部分は黒いリングみたいのにして。

あとフードの付いてるマントも付けて」



「良いですけど…なぜ？」

「最初は顔をバラさずに、後からバラす作戦だ！」

ふざけた作戦だな…って声までナツと一緒にだ！？」

「あ、そう」

…

とその時、服装まで変わった。完璧にナツそっくりだ。

そして後ろにはマントがあった。そのマントを前まで出し、

完全に体が隠れるようにした。

そしてフードを被ってみた。すると、相手からは

ほとんど口しか見えない様な状態になった。

不審者だな…。

「ところで、魔法は何使えるんだ？」

フェアリーテイルに行くんだったら魔法が無きゃ意味無い。

「はい。神の滅竜魔法を付けました！」

なんですと—————!？」

神！？つまり神竜じゅうりゆうってこと！？

「神竜は火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等の  
さまざまな元素を含みます。なので、ほとんどの魔法は

あなたにはほとんど効きません」

まさに最強じゃん！

「いいのが、そこまでしてもらって…」

「ええ。いいですよ。では準備はこれくらいでよろしいですかね」

「ああ、ありがとな」

短くお礼を言った。

「どういたしまして。それでは行ってらっしゃい、

『フェアリーテイル  
妖精の尻尾』の世界へ！」

リリスが最後に手を振った。

その途端、オレの視界がまた闇に包まれた。

さあ！フェアリーテイルの世界へ出発だ！

## フェアリーテイル加入（前書き）

さて、フェアリーテイルの世界に降り立ちました！

## フェアリーテイル加入

マグノリアの街…フェアリーテイルのギルド前…

雨が降っていて、冷たい水がオレの体を叩く。

「着いた…ここがフェアリーテイルってギルドか…」

見た目はまだ10歳かそこらの少年がギルドの扉の前に立っていた。

昔の現実世界の記憶など全く無く、フェアリーテイルがどういう

世界かも知らない状態でこの世界に降り立った。

少しある記憶から行くと、オレは1〜2年ほど前まで

神竜『マスタードラゴン』に育てられ、神の滅竜魔法を覚えた。

ところが、ドラゴンは突如オレの前から姿を消し、オレは途方に暮れていた。

神竜しんりゅうからもらった、首の黒いリング…。そのリングの下には

傷があり、それが首をグルッと一回りしている。

そして途方に暮れて旅をしている時、小さな村にあるギルドに

入った。クエストをこなし、お金を貯めている時、変なタマゴを森で見つけた。ギルドの人の了承も得て、温めていると、羽の生えたネコが生まれた。しばらく、付ける名前を考えている時、このネコが生まれた事で、ギルドに幸運がドンドン舞い込んできたので、

『ラッキー』という名前を付けた。そして、ラッキーを連れて、その後も

クエストを遂行していった。

だが、あるクエストから帰ってきた時、ギルドは火の海となっており、

呆然と立ち尽くした。火が収まって中に入ってみると、『闇ギルド』と

名乗る3人ほどのクズ共がいた。死んだ仲間の背中にどっかと座り込み、

「クソ、ここは貧乏ギルドかよ…」

「弱え奴しかいねえもんだな」

「貧乏くじ引いたな」

と、仲間達を侮辱している姿を目にした時、怒りに震えた。

そして、滅竜魔法で3人共、跡形もなく消し飛ばすと、

「ここが、てめえらの死に場所だ…」という台詞を言い放った。

ギルドの燃えた木材などを全て片づけ、遺体を横に置き

地面を砕いて、大きな穴を作った。

その穴に、遺体を入れた。入れている間に、涙が

とめどなく溢れ、止めることができなかった。

全員を埋葬し終わり、ラッキーと共に、手を合わせ

もくとつ  
黙禱を捧げた。

ギルドマスターの羽織っていたマントを被って、また

途方もない旅に出た。

途中で、貯めたお金を使い、飯を食って、宿に泊まったりもした。

街まで行けないときは、そこらへんの魔物を狩って、野宿した。

途中、ラッキーが風邪を引いたが、必死の看病で治った。

そして、ある街まで着いた時、宿の人に相談を持ちかけた所、

「マグノリアという街にフェアリーテイルというギルドがある」

と聞いた。

そして、教わった通り、来てみると、マグノリアという街に着き、  
そしてギルドを見つけた。

そして今に戻る。

「やっと着いたな…」

「入らないのディオス？」

「ん？ああ、そうだな…」

「…やっぱり、前のギルドのこと思いだしてた？」

前のギルド…。オレがいない間に消されたギルドだ…。

思いだすと、また涙が出てきた…。

「…う…クソ…」

「ディオス…」

そういえば、ラッキーには苦労かけっぱなしだったな…。

早くはいらねえと、また風邪ひいちまうかもしれねえ。

そんな話を終え、ギルドの扉を押した。

ドンチャンドンチャン騒がしいギルドだった。

その中を2、3歩歩いた途端、静まった。

途中、大人や子供が

「見ない顔だなあ…新入りか？」

「今度はちつたあまともだろうな」

等の声が聞こえた。

そして、カウンターにたどりつき、カウンターに

座ってる老人に声をかけた。

なぜ、カウンターに座ってる？

「すみません、フェアリーテイルというギルドはここでよろしいですか？」

「そうじゃ。お前さんは誰じゃ？ずぶ濡れじゃないか」

「お構いなく…。オレはディオスと言います。それで、ここにいるのが…」



マントを少し開けると、ラッキーが顔を出した。

「ラッキーです」

「やうー！」

とラッキーも挨拶した。

「ふむ…ハッピーみたいじゃな…」

「ハッピー？」

「あ、いやいや、何でもない。ところでお前さんはここに何しに来たんじゃ？」

「そういえば、そうでした。オレ、ここに入りたいのですが大丈夫ですか？」

「ああ、構わんよ。ここに入りたいという気がありさえすれば入って結構じゃ」

「ありがとうございます」

「そうじゃ、ワシの名前を言ってなかったの。ワシはこのギルドのマスター。」

マスター・マカロフじゃ。よろしく頼むぞ」

「はい、よろしくお願ひします」

と握手を交わす。

「ところで、ディオスとやら。お前さんは、どんな魔法を使う」

「あ、はい、滅竜魔法を使います。神の滅竜魔導士です」  
ドラゴンスレイヤー

「な、何!?!」

マスターがいきなりビックリしたので、

オレまでビックリした。

「か…神のドラゴンスレイヤーとな…具体的にはどういったものなのじゃ?」

「こんな感じですね」

オレは右腕を出して、指先に火、水、風、土、雷を出して、

消した後、拳を鉄にした後戻し、氷を作り、毒で氷を溶かした。そして腕を光源体にし

そのあと、闇の力で小さなブラックホールを作って見せた。

そして、最後に全てを混ぜて、虹のような物に包まれた拳を見せた。

全ての元素が渦巻いて出来ているため、虹のように見える。

「こんな感じですよ」

とオレは口を開けた。

自分でやって見て思うがマジックみたいだ…。

そして、マスターはと言うと、口をあんどぐり開けている。

「ほ…ほとんど全ての魔法じゃないか！お主…」お前、すげえー  
なあ！」「…」

とマスターの話が終わってないというのに叫んだ少年がいた。

桜色の髪に、ツリ目。首には鱗のようなマフラーをし、

チラリと首の右側にキズが見えた。

「き…君は？」

当たり前のことを聞く。

「オレは、ナツだ。お前、ドラゴンスレイヤーなんだってな」

あいさつ短っ！？というか『よろしく』も言ってるねえし！

まあ、いいや。

「ああ、そうだけど…」

その時、少年の口がニヤツ…っとなったような気がした。

「オレもドラゴンスレイヤーなんだ！」

悪い予感がしてならない。

「ディオスって言ってたな。オレと勝負しろ！」

悪い予感の中…。

「おいナツ。新しく入ったばかりなんだ、そういうのは後にしてやれ」

その時、見た目からすると12歳あたりだろうか？

赤い髪をした少女がやって来た。

「君が新入りの子か。私の名はエルザ・スカーレット。よろしく頼む」

ホントに10歳前後なのかというほどきちつとした挨拶をしてきた。

「はい、よろしくお願ひします」

握手を交わす。

と、今度はナツやオレと同年辺りの少年が来た。

…パンツ一丁で。服着ようよ…

「ったく、ツリ目野郎。他の奴らにも挨拶させるよ」

とこっちに手を差し伸べてきた。

「オレの名前はグレイ・フルバスターだ。よろしく頼むぜ」

「はい、よろしくお願ひします…それより服着ないんですか？」

「はっ！しまった！」

なんなんだ…この人は…

そんなことを思いながら手を握る。

その時、ナツが突っかかってきた。

「んだと、タレ目変態野郎！言ってくれろじゃねえか！」

「あ！？やんのかツリ目！？」

と突然目の前で喧嘩をはじめてしまった。

仕方ないので止めることにした。

「あの、喧嘩は「やめんかあ！」「…」

バキッ！

ゴッ！

止めようとしたら、エルザが叩き落して止めた。

「まったく！お前らは少し礼儀をわきまえたらどうだ！？」

ごもつともで…

その時、エルザの後ろから声がした。

「まったく！お前らは少し礼儀をわきまえたらどうだ！？…ってか？

アハハハッ、けっさく〜ハハッ！」

白い髪をポニーテールにした、へそ出し少女が来た。

いかにも不良少女だ。

「あっ？なんだ貴様？言いたい事があるならハッキリ言えば良いだろう！？へそ出し女！」

え？

「んだと？やんのかコラ？ボコボコにしてやんぞコラア！？」

え、え？

「おもしれえエルザ、この前の続きだあ…ボコボコのギタギタにしてやる！」

「上等だ！ミラ、かかってこい！」

つて、結局てめえらも喧嘩かあ！！

「ガリガリ！」

「へそ出し！」

「ブス！」

「アホ！」

「デブ！」

「へそ出し！」

つて、それにしてもレベル低すぎだろ！？

それに

「何で誰も止めないの！？」

と、答えはすぐに帰ってきた。

「止められるわけ無いよう！あの二人のケンカは、

ナツとグレイ以上だぜ？」

ダメだこりゃ…

仕方がない。こうなったら次こそオレが…

「まあ、二人とも喧嘩h「邪魔だっ！」「ふでぶっ！？」

…返り討ちにあいました。

宙を飛んでるディオスを見て、周りの連中は

いつもの結果だ…というふうな目で見ていた。

オレはと言うと、空中で一回転しながら、着地…

「ハア…つてえな…」

もはや、礼儀も手加減もいらないとわかった…このギルドは…

周りから「おお…」とざわめいているが、ここはスルー。

「ここが…」

ん？

「てめえらの…」

え？

「死に場所かあ…！」

ヒュン！という音とともにミラとエルザのそばまで行き…

「はあっ！」

ドカッ！

ベキッ！

「ぐぶっ！」「」

腹に思い切りパンチを喰らい、吹っ飛んだ二人。

周りの人は目が飛び出るほど驚いている。



「何をする貴様！」

「何すんだてめえ！てめえもボコボコにすんぞ！」

「つて、起きるの早っ!？」

「じゃなくて！」

「黙れ！ナツとグレイの喧嘩止めた後に自分が喧嘩してどうすんだよ!?!？」

周りの人が「「「「「おお〜!」「」「」「」と驚いていた。

そんな驚く事なのか？

「うるせえ！新入り風情が！」

「いや、待てミラ。確かに奴の言つとおりだ…」

「エルザ!？」

良かった…ミラはキレてるがエルザは反省してい…

「そこで貴様に勝負を挑む！」

……………は？

「そいつは名案だ。こいつをボコボコにして、次にエルザをボコボコにしてやる!？」

……え？

「おっじゃあ！オレも混ぜろオー……！」

……おいナツ……

「そりゃ、ちと面白そうだ……」

……グレイまで！？そして服着ろ！

「……勝負だ！！ディオス！！」

なんでこうなるんだ……！！？

そんなこんなでフェアリーテイルから離れて、マグノリアの海辺……

ここで、勝負をすることになった。

マスターや周りの人はみんな見に来た。

そんなことよりも……

「4対1ってあり！？」

さすがにコレはないだろう！

「私とミラに一発入れたんだ。これくらい余裕だろう」

「早く始めようぜえ、早くエルザをボコボコにしてえんだよ」

「燃えてきたぞ…」

「へっ」

「いやいや、あの時は二人だったから…」

「っっていうか、ミラっただけエルザをボコボコにしたいんだ?…」

「燃えてきたぞ…っって初めからも燃えてんじゃん」

「そして、なぜ服脱ぐグレイ!？」

「なぜか、入って早々の決闘が始まるうとしていた。」

「いや、これランチだ!？」

「終わり…」

「っっておい!オレの話がm」

## フェアリーテイル加入（後書き）

次、ディオスvsナツ、グレイ、エルザ、ミラジエーン

始まります！

ディオスvsナツ&グレイ&エルザ&ミラジエーン(前書き)

さて、ついに戦い始まります。

もっと後にしようかと思いましたが、

ここでディオスの正体バラしちゃいます

## ディオスvsナツ&グレイ&エルザ&ミラジエーン

「それでは、これより、新入りのディオス対ナツ、グレイ、エルザ、ミラジエーン

の試合を始める！」

( )( )(マスター・・・)( )( )

マスターの呑気な発言に呆れる一同。

「始めい！」

マスターの号令によって試合が始まった。

オレからすると、リンチにしか見えないが…

「「「行くぞっ！ディオス！」」」

4人いっぺんにかかってきたし!?

「換装！天輪の鎧！」

エルザの鎧がはがれ(なんかエロいし!?)、セクシー!…

な鎧に変わった。

「全身テイクオーバー、サタンソウル！」

ミラジェーンの頭の上に魔法陣ができ、体に変化が起きていった。

尻尾が生え、服は露出度半端ない服装になり、腕は魔物の腕のようになり、右目にヒビのようなものができて、髪も逆立った。

完全に悪魔そのものだ…ってサタンソウルって訳せば

『悪魔の魂』だからな…当たり前か。

ナツはと言うと、息を吸い込んでいる。ブレスでもやるのか？

まあ、エルザやミラジェーンに比べれば魔力は低いので

あまり、気にしない。

グレイは左手の平に右手の拳を重ね…魔力を溜めている。

何をするのだろうか？そして、服着ろよ！？

「舞え剣たちよ！」

エルザに目を戻すと、体の周りに多数の剣を出していた。

どうやら、あの鎧は、多数の武器を同時に操ることができるらしい。

「循環の剣！」

多数の剣が巡回しながら襲ってきた。

「ダークネス…ストリーム!!」

ミラジエーンはというと腕から、闇の腕の様な物を放った。  
あたれば、それなりに痛いだろう。

「火竜の…咆哮!」

ナツは、先ほどまで吸いこんでいた息を止め、  
ブレスを放った。

なるほど、火の滅竜魔導士か。

「アイスメイク…ランス槍騎兵!!」

グレイは、氷の槍を5〜6本放ってきた。

刺されば…痛いだろうな。当たり前か。

4人の必殺技にも近い、あの技を喰らったら  
ひとたまりもないだろう。

少し、驚かせてやるか…。

つま先でトントンと地面を叩くと、魔法陣が生まれた。

「…しんそく神速…」



4人の技が当たる直前に、一瞬で移動した。

「……!?」「……」

4人とも何が起きたか分かっていないようだった。

オレは、ナツの背後にヒュン!と現れ、右手に魔力を集中させた。

大気が圧縮されるかのように右手に集まり、旋回する空気が生まれた。

「天竜の……」

いきなり、背後から聞こえた声に、ビクツと反応したナツだったが、少し遅かったな。

「鉄拳!」

ドゴオツ!

と振り向いたナツの腹に思いっきり叩きこんだ。

その時、オレの拳を包んでいた、旋回する空気が

ナツの体を回転させた。

「うああああああ!?!」

そして、ナツは回転しながら吹っ飛んだ。

見ていて思うが、コッチまで目が回りそうだ。

ドザアアツ！とナツは砂浜の上を転げまわっていた。

「いつの間に、ナツの背後につ！？」

エルザが驚愕の声をもらす。

まあ、マツハに似た速度で4人の術を避け、

ナツの背後に滑り込んだわけだからな。

動体視力が余程でない限り、目で追いかけるのは

困難だろう。

「まずは、1人つてかな？」

オレは軽い口調で言い放った。

その軽い口調が残り3人の怒りを買ったようだ。

「新入りが！いつまでも調子乗ってんじゃねえ！」

おーお…悪魔の姿で言われると迫力増すわ…

「だな。そろそろ本気でいかせてもらおう」

あら…本気じゃなかったんだ…

「ツリ目野郎を倒したぐらいでいい気なるなよ？」

お前の魔力もナツとほとんど変わらねえのにな…

じゃあ、オレも本気見せてやるかな！

「体質を、火竜と雷竜に変更…」

「「「！？」」」

バチバチツ…

「・・・雷炎竜…」

火竜と雷竜を融合させた。

炎に雷が纏う…。

「なんだ、あの炎は！？」

エルザもさすがに驚いているな。

「はっ！見せかけだよ、あんなの！」

勢いづくのは良いけど、震えてちゃ迫力無いよ？ミラジエーン…

「ツリ目野郎の炎とは全然魔力の格が違うな…」

そりゃそうだろ、雷も混ざってたんだから。

「そろそろ、終わりにしてやるよ…」

オレは声を上げて、息を吸い込んだ。

「『なめるなあっ！』」

相手の3人も全魔力を開放したようだ。

その時、吹っ飛んだナツまで復活した。

ホント、復活すんの早いな、このギルドの連中…

「へ、ドラゴンスレイヤー同士、どっちが上か…ここで決めるぜ！」

威勢のいいこと言うてるけど、フラフラじゃん！

「天輪…」

「ソウル…」

「アイス…」

「右手の炎と左手の炎、合わせて・・・火竜の…」

「雷炎竜の…」

それぞれが、最大級の技を出そうとしているのが、魔力を感じただけでわかる。

さて、どっちが上かな？

フルーメンブラット  
「繚乱の剣！！！」

一瞬でオレの背後まで来たエルザが（見えなかった…）すり抜けざまに

無数の剣をあびせた。そして、ガツクリと膝をついた。魔力切れのようだ。

「イクステイクター！！！」

両手の間にできた闇の球から波動を放ったミラジエーン。

「キャノン！」

両手に氷でできた大砲を作り、ぶっ放したグレイ。

「煌炎！」

両手の炎を合わせて作った炎弾を放ったナツ。

「咆哮！！！」

そして、オレは特大の雷付きの炎のブレスを放った。

剣、闇の波動、氷の弾、大炎弾、雷炎ブレスがぶつかりあった。

「（くっ…）」

さすがに、数が違うため、少しコッチが押されている。

少しずつだが、相手の術がブレスを押しつけ迫ってくる。

だが…

負けられねえ！たった4人に負けていたら、またオレは

仲間を失っちまうかもしれねえ…

あの経験は…一度だけで…十分だ！！

そして、気づかぬうちに全魔力を開放していた。

「だあああああああああ！！！！！！」

ブレスがさらに大きくなり、4人の術を全て薙ぎ払い、

ミラジエーン、ナツ、グレイがブレスの直撃を受けた。

「くくくああああああああ！！！！！！」

そのまま、ブレスは海の上を突き抜け、水しぶきを上げながら、

水平線の彼方まで消えた。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

さすがに疲れた…全魔力使いきっちゃった…。

砂浜の上にミラジェーン、ナツ、グレイが横たわっていた。

どうやら、気絶したようで、ミラジェーンは元の姿に戻った。

ナツとグレイも気絶している。

オレの後ろでは、元の鎧の姿に戻って、疲れ果てたエルザがいた。

観客…ギルドの人達は、マスターを含め、口をあんぐり開けて、ただただ

啞然としていた。

そして、正気に戻ると、

「すげえっ!」

「やるなあ、あの新入り!」

「あの4人をやっつけちまいやった!」

「すごかったなあ!今の咆哮!」

「ミラ姉えとエルザが負けた…」

等、声を上げた。

その時、後ろからエルザが近付いてきた。

「ハア…参った…私たちの負けだ…」

と言い、手を差し伸べてきた。

その手を掴むと無理やり起こされた。

どこにこんな力あるんだ？

すると、気絶していた3人も来た。

だから、復活早えよ！？

「ボコボコにしてやろうと思ったら、反対に

ボコボコにされちゃった…」

なんか、ごめんなさい…

「くっそー、何だよ最後の攻撃！有りかよ！？」

有りなんだよ。

「オレがツリ目とエルザ以外で初めて負けた…」

すまん。

「勝者！新入り、ディオス！」

「oooooooooooo！！！！！！！！」

マスターがオレが勝利したことを宣言すると、



さらに、声が大きくなった。

「今度、もう一回勝負しろ！次はぜってえボコボコにしてやる！」

「私もだ。次は絶対に負けはせん！」

「おっしゃー！ディオス、ぜってえ越えてやつからな！」

「ツリ目じゃ、無理だ」

「んだと、タレ目野郎！」

「てめえ、一番最初にぶつ飛ばされてんじゃねえか！」

「でも、起きあがっただろ！」

「少し気絶してたじゃねえか！」

またかよ…ナツ、グレイ…。

そんなことを思っていた時…

ギルドの集団の中から、オレに向けて何かが飛んできた。

戦闘で疲れていたため、気づくのが遅く、直撃を受けた。

バチィッ！！

…雷…？

神竜だから、雷は効かないが、不意打ちとは何事だ…。

その時、マントが破けてしまったことに気付いた。

やばっ…!!

周りでは、

「何だ今の？」

「雷か？」

「ってことはアイツじゃねえのか？」

等の声が上がっているが、オレはそれどこじゃねえ。

そして、煙が晴れ、オレの素顔がさらされた。

その途端…

マスター、ナツ、グレイ、エルザ、ミラジエーンを含め、

ギルド全員のアゴが地面にガン！と落ちた。

いやいや！そんなに驚かなくても…って言う方が無理か。

ナツと同じ髪型だが、髪の色は黒、そして顔はナツと全く変わらな  
い。

首はマフラーではなく、黒いリングが光っていて、服装は上半身は露出度がはげしい

服で、ズボンは膝ら辺でヒモで縛られており、色は黒、そして、腰にベルトでマントの様な

ものが固定されており、そのマントは左足の膝ら辺まで覆っている。これも黒色。

だが、服装よりも、みんなの目はオレの顔に釘づけになっていた。

そして、その途端…

「「「「「「「「どっなっているんだー！ー！ー！ー！ー！？？？？」」」」」」」

と、マグノリア全体に響きそうな声が轟いた。

「ナツ…じゃねえよな…」

「いや、ナツはそこにいるからナツじゃねえだろ！」

「だからって、似すぎだ！分身みたいじゃねえか！」

「服装カッコいい…」

「「「「言つとじ、そっ！？」」」」

と、なんかコントまで混ぜた声が聞こえてきた。

そして、話が止むと、みんな、またこちらを向き…

「…………お前、何者なんだよ!?!」「…………」

と同時に聞いてきた…ここまで声揃うことは稀だよな…。

オレは少し考え…声を上げた。

「…言わなきゃダメですか?」

苦笑いしながら言っちゃってるよ、オレ!

「…………当たり前だ—————!」「…………」

全員同時にツッコみが来た。よく声揃うね?…そこじゃないか

なんだか、ギルドに入って早々…ややこしくなっちゃったなあ…

と思いつつ、心の中では面白がっているディオスだった。

ディオスvsナツ&グレイ&エルザ&ミラジエーン(後書き)

次、ディオスの正体を詳しく(多分)書いていきます！

正体明かすの早くてすみません。

**ディオスの正体！？（前書き）**

さて、正体をジャンジャン書きたいと思います。（多分）

ナツとソックリなディオスの正体は…

ディオスの正体!?

「やっぱりなあ……」

オレが、どう説明しようか考えている時、集団の中から声が聞こえた。

そして、周りの人をどかしながら、その男が出てきた。

金髪で、なんか針みたいのが付いたヘッドホンをしており、

右目には稲妻のような切り傷がある。

「ラクサス……」

マスターが声を上げた。

どうやらラクサスと言つらしい。右目の傷が稲妻のような形をして

いるから、おそらく、先ほどの雷撃はこの男の仕業だろう……。

「ラクサス、『やっぱり』というのはどういふことじゃ……」

マスターが問い詰める。

「まったく、じじい共は気づかなかったのかよ……? コイツの声が

ナツとソックリだったってことによお?」

ヘッドホンしながら声がよく聞こえるな…

「……………言われてみれば……………」

言われて気づくんかい!?

「で、てめえらの後をこっそりつけさせてもらって、隙を見て、オレが攻撃したのさ…」

もちろんマントをはがすためにな…」

ホントかよ…、喰らってみて思うが、手加減とか感じなかったぞ…

「…おめえ、ナツのクローンか何かか?」

クローンって…どうやってたらそこに思い当たるんだ?

「違う違う…クローンでも何でもないよ…ただ単に…」

「……………ただ単に…?」「……………」

周りの人が耳を傾ける。

「ナツの双子の兄ってだけの話だよ」

「……………双子……………!!!…?」「……………」

だから、ビックリしすぎだろ…それに声揃いすぎ。

「…って、お前、ドラゴンに育てられたんだろ!?!…なんで、



弟がいるなんてこと知ってただよ!？」

追求してきた…。

「オレの親…マスタードラゴン神竜は特殊な能力をいくつも持っているんだ。…

その目で人を見ただけで、その人の血のつながりとか全部見えちゃう。だから、

オレが7歳くらいになった時に、突然教えてくれたんだ…。オレに双子の弟がいるって

事を…」

「……………おおー……………」

ここ、意外と驚かないんかい!？」

「だから、オレは、神竜がいなくなった後、途方もない旅をするついでに

弟を探そうと思ったんだ。それで、マグノリアにオレにソックリなやつがいるって

聞いて、ここに來たんだ。それで、見つけたのが…」

オレはナツの方を向き…指差した。

「ナツだ」

「なるほどのう……」

マスターが口を開けた。

「じゃが、なぜ、マントで顔を隠した？」

そして、問い詰めてきた。

「いきなり、同じ顔の奴が来たら、ビックリしちまうだろう？だから、ここに入って、

しばらく顔を隠しながら過ごして、慣れてきたところに、姿を明かそうと思っていたんだ」

オレは、今度はラクサスの方を見ると

「その計画のつもりが、不意打ちによってパーだよ」

と、ちょっと怒り混じりの声で言った。

少し、ラクサスが後ずさった。

してやったり！……

「というわけです。マスター」

「ふむふむ……事情はよくわかった……。つまりお前さんの名前は……」

「ディオス……ドラグニルです」

ついに実名明かしちゃったー…

チラリとナツの方を見ると、まだアゴが地面についていた。

いいかげん戻れよ…

「とりあえず、ディオス！よろしくのう！」

つて、話終わり！？

すると、みんなも少しずつ笑みが戻っていった。

と、突然ナツが声を上げた。

つて戻ったんだ、お前…

「まさか、オレにこんな兄がいるなんて…」

おい、『こんな』ってどういう意味！？

「なあ、ディオス…」

て、呼び捨て！？兄を！？まあ、同じ歳だからいつか…

「その服ってどこで買ったんだ？」

「……言う所そこかよ！」「」「」

オレ、グレイ、エルザ、ミラジェーンがツッコんだ。

この服、そんなにいいのか？

その時、白い髪をしたナツと同じ歳くらいの少女がやってきた。

「ナツが増えたーっと思ってビックリしちゃったよー…」

「ごめんなさい…」

「つて、君、誰！？」

「リサーナ、アンタも来てたのか！？」

突然、ミラジエーンが声を上げた。

「ん？よく見ると、この二人似てね？」

「リサーナ、どこ行ってたのか心配したぞ！？」

「と、今度は、10歳前後の学ラン来た白い髪をした少年がやってきた。」

「白い髪多いな…このギルド…」

「つて、待て…コイツもどことなくミラジエーンに似ているような…」

「あ…あの…この2人は…？」

「恐る恐る聞いてみた。」

それにエルザが答えた。

「ああ、この3人は兄妹なんだ。1番上がミラ…2番目がエルフマン、

そして3番目がリサーナだ」

なんと、兄妹だったの!?

どつりで似ているわけだ…

すると、エルフマンと言われた少年が挨拶しにきた。

「やあ、僕の名前エルフマンって言つんだ。よろしく…」

変わった名前だなあ…と思いながら握手を交わした。

しかも体格でか!?

すると、今度はリサーナと呼ばれた少女が来た。

「私の名前、リサーナって言つてよ!よろしくね!」

元気いっぱいだなあ…と握手を交わす…。

「ホントにナツそっくりだね…アナタもかわいいかも!」

……………へ?

「おい、リサーナ…も、って言つことは…」

あのナツが震えている！？

「もちろん、ナツも含むに決まってるじゃん！」

……………サディストか…？

そんなことを思っていないながら、その様子を見ていた…。

すると、話が終わったのか、何なのか、横にいたエルザ、グレイもオレの前に来て、

他の人たちも集まってきた。

なに・なに！？オレなにされちゃうわけ！？

と知っているよ、

「……………とりあえず…フェアリーテイルにようこそ…！…！」「……………」

と言われ、いきなり、囲まれた。

そして、体を持ち上げられて…

「……………わあっしょい！わあっしょい！わあっしょい！……」「……………」

と胸上げされた…。なぜ…？

「まつさか、このギルドに2人目のドラゴンスレイヤーが来るとはな…」

なるほど…、滅竜魔法は現在のように簡単に覚えられる魔法とは違うんだ…

何せ、エンシエント スベル 太古の魔法とまで言われているしな…

そんな、めずらしい魔法を持った人が、また1人増えたんだから、うれしくなるのも

無理はない…

その時、胴上げの最中に、みんなが一斉に離れた。

つて…おい…このままじゃ、オレ…

またもや、悪い予感の中で…

ドシューーン！と地面に叩きつけられた…

地味に痛い…

「な…何するんだよお…」

少し涙目になって言うと、ミラジーンとリサーナが口をそろえて言った。

「「やっぱ、かぁわいいー！」「」

..... やっぱりサディストでしたー！！

そこに、ラッキーが来た。

って、お前、どこにいたんだ...？

「やっ！ディオス！...もう食べられないよお...」

..... はい？

すると、この猫を追いかけてたのか何なのか、分からん人が来た。

「やっ！と追いついた！この食い逃げ猫！」

..... なんですと！？

「あー！アンタ、この猫の飼い主かい！？」

どうやら、飲食店の店主のようだ...

って、この展開はまさか...

「このバカ猫が食った食べ物の代金！払ってくれるんでしょうな！  
？」

と何かの紙を渡された...。

ナツ、グレイ、エルザ、ミラ、リサーナも一緒に覗き込むと...

『焼肉定食 780』



『豚キムチ 580J』

.....

.....

.....

.....

.....

合計... 24000J...

.....なんじゃこりやーーーーー!!???

ラッキー！お前どんだけ食ったんだ!?

その犯人はというと、オレの腕の中でグースカいびきかいてやがる...  
周りの人は腹を抱えて大爆笑していて、店主はものすげえ怒っている。

やっぱり、オレって悪い予感しか的中しないのかーーーー!?

この、クソネコーーーーーー!!!お前の名前『アンラッキ  
ー』にすんぞ

そんなこんなで、お金はきちっと払って謝って、爆笑しているみんな

なを鎮めるのに

時間を大幅に費やした…。(ギルドへの帰り道、ミラトリサーナは  
まだ笑っていたが…)

入った早々、恐ろしい目に会ったけど…これから先、大丈夫なのか  
…オレは？

ディオスの正体！？（後書き）

ようやく、終わりました。次の話は、これから2年後の話です。  
ギルダーツが出てきます。  
お楽しみに！

## ギルダーツ(前書き)

さて、ギルダーツが、ついに登場します…って  
まだ、ナツとかリサーナが子供の頃だよ？

## ギルダーツ

フェアリーテイルに入った早々、いろんな事あったけど、

あれから2年が経過した。今のオレは11歳。

言わなくても分かるかも知れんが、ナツも11歳だ。双子だからな。

それなりに身長も伸びたが、魔力の方もだいぶ上がった。

度々、ナツに喧嘩を挑まれるが、いつつも勝ってる。

グレイ、エルザ、ミラ、リサーナ、エルフマンも時々、

喧嘩の見学してるが、最初から分かりきっているかのような目で

見ている。

そして、今も喧嘩の真っ最中だ。

「はあっ！やあっ！たあっ！えいっ！」

両手に炎を纏わせ、いろんな方向から攻撃してくる。

オレはと言うと、片手で全部はじいて、攻撃する隙を探している。

「ナツは懲りないな。いくら攻撃しても、あれじゃ勝負にすらなっていないぞ」

エルザが呆れている。

その時、ナツが少し疲れてきたのか、攻撃が遅くなった。

そして、バランスを崩した。

オレは拳を鉄にして、氷で包んだ。その周りを  
火、水、風、土、光、闇、雷が纏う。

「神竜の鉄拳！」

バキィッ！！

そして、思いっきり顔面にお見舞いした。

「ぶふっ！」

ナツが宙を舞って吹っ飛ぶ。

ズザアアッ…

そのまま床の上を転がった。

そして、動かなくなった。

一発で気絶かい…

「また、ツリ目の負けか。これで何回目だ？」

グレイが声を上げた。まず、服着ようぜ…？



ボゴン…バガツ…ベコオ…

徐々に大きくなっていく…何この壊れるような音？

その時

「おやじの奴…またか…」

だから、何が!?

我慢の限界で、聞いてみた。

「あの、ギルダーツって…誰ですか？それに、この音はいつたい…」  
それにハッピーが答えた。

「あい！このギルド最強の男候補だよ！」

なにー!?!フェアリーテイル最強の男だと!?!

「で、今、聞こえている音はギルダーツのせいなんだ」

「え？いつたい、何やってんの？帰ってくるだけで？」

それに今度はエルザが答えた。

「ああ、ギルダーツは『クラッシュ粉砕』という魔法を使うんだ」

「クラッシュユ？」



「物を粉々にする魔法さ。だが…その魔法のせいでちょっと問題が起きるんだ」

「問題？」

さらに、聞くと、今度はミラが答えた。

「あのオヤジは、ぼーっとして歩くことが多くてな。そのせいで、民家をクラッシュで

突き破って来ちまうんだよ。で、今の音は、その民家の壁を突き破る音さ」

ええええええええ！？すげえ、魔法だけど、魔法使う本人どんだけバカなんだよ！？

その時、ギルドの門に大きな影が現れた。

「……………ふう……………疲れた、疲れた」

「……………おかえり！ギルダーツ！！！！……………」

うわ、すげえ、はしゃぎよう…

「ギルダーツ！オレと勝負しろー！」

その時、ナツが吠えた。

って、いつ起きたお前！？

「なんだ、ナツか。オレは仕事から帰ってきたばっかなんだ少しはゆっくり……」

「いくぞお！火竜の鉄……」

ボゴオツ！

「けええええええええええん……」

ギルダーツのカウンターのパンチを受けたナツは、

ギルドの天井を突き破って、山の彼方へ消えて行った。

「……………」

思わず、唾然としてしまった……

どんな腕力してるんだよ!?

その時、ギルダーツがオレの姿に気づいた。

って、遅っ!?

「…………え?…ナツ!?オレさっきぶっ飛ばしたような……」

ナツの飛んで行った方と、オレを交互に見ながら戸惑っていた。

なので、自己紹介することにした。

「あ、オレはナツの双子の兄……ディオスです……ども、よろしく……」

やべえ、カチコチなっちまった…

「なにいいいいいい！！！！？？？」

ギルダーツのアゴがガクンと落ちた。

オレの正体を知った時のギルド全員の顔と全く一緒だ。

すると、オレの肩を掴んでゆすつてきた。

「ナツの兄！？アイツ、兄なんていたのか！？それにしちゃ

ナツみてえな暴れん坊にや見えんが…」

オレって、ナツと同じように見られてたわけー！？

なんか、ショックー！！

「ナツと一緒にするなー！」

と、いつの間にかツツコんでいた。

「いやあ…驚いた…いままでで一番驚いたかもなあ…」

そりゃ、どつも…

「まあ、とりあえず、…名前なんだっけ？」

忘れるの早っ！？

「ディオスだよ、ギルダーツ」

ハッピーが教えた。

「そうだそうだ、ディオスだ。オレはギルダーツ。コイツ等にゃ、オヤジとか

言われている。とりあえず、よろしくな」

確かに、他の人と比べると年長者だしな…オヤジって言われる理由が分かるかも…

「はい、よろしく…」

と、手を握った。

…硬っ！？それも力入れすぎやって！痛いっの！

手を離すと、ジーンとしていた…

「ナツの兄ってんなら、大歓迎だ。家にも遊びに来い。ナツみたいに勝負してやってもいいぞ？」

「ぜひ、行きます！勝負は…結構です…」

さっきの見たら、勝負なんてしたくねえ…

「そうか」

ギルダーツは短く返事すると

「そういえば、マスター」

マスターの方を向いた。

「ん？なんじゃ、ギルダーツ」

「そろそろ、S級の昇格試験の時期じゃねえか？」

え？S級の昇格試験？なにそれ？

「おお、そうじゃった、そうじゃった」

言われて気づくの！？

「そろそろ、S級昇格試験に出る者の名を言わなければな」

マスターはギルドの奥の方に入っていた。

S級、昇格試験という言葉の意味が分からなかったので、エルザに聞いてみた。

「エルザ、S級昇格試験ってなに？」

「ああ、そういえば、ディオスには話してなかったな」

「S級昇格試験というのは、S級魔導士になるための試験だ。毎年一回あって、

マスターが各々の力、心、魂等を見極め参加者を決めるんだ。その試験には1人しか

クリアできないが、クリアするとS級魔導士というのになり、そのギルドの

主力メンバーの証でもある。そして、S級クエストという、今、私やディオスが

やってるクエストとは比べ物にならない位の難易度が高いクエストを受けれる

様になるんだ」

「へえ〜〜〜!!」

「すごい!とオレは心底驚いた。

うわ〜、出てえなあ〜…

と思っていると、マスターが戻って、カウンターの前に飛び上がった。

「では、これより!S級昇格試験の参加者の名前を発表する!」

「「「」

ギルドの中が、また騒がしくなった。

「ワシは、各々の力、心、魂…を見極めてきた。その中で！今回の参加者は

3名！…！…！」

3名か…少ないな…

そういえば、1年ごとして事は、去年、誰がS級なったんだろう…

「エルザ、去年は誰がS級になったんだ？」

思わず、エルザに聞いていた。

「ああ、去年は合格者はいなかったから、S級になれた者はいなかった」

なんですとー！？合格者無しってこともあるわけ！？

そんな時、マスターが参加者の名前を上げた。

「まずは…エルザ・スカーレット！…！」

「わ、私が…！？」

「すごいじゃないか！エルザ！」

周りも

「……………おお……………」

と言っている。

「2人目は……ミラジエーン!!」

今度はミラ!?

「ようやく、来たか……」

なんか、自信满满だなあ……

さて、次は最後だ……

誰が来るかなあ……

「最後は……ディオス・ドラグニル!!」

「……………え？」

「……………へ?」「……………」

オレも含めたマスター以外の全員が素っ頓狂な声を上げた。

だが、突如、その顔は、なぜか輝きだし……

「すげえっ!!」

「ディオスが選ばれたよ!」

「たしかに、アイツが完了したクエスト、かなりあつたよなあ」



「ディオス、すごい！」

等と声を上げているが、オレはまだ啞然としていた…

「以上で、参加者の発表を終える！！あと、今回は…」

そこで、最凶最悪の言葉をマスターは発した。

「ギルダーツが3人の道を塞ぐ！」

「「「「「なにー！！！！？？」」「」「」」」」

オレ、エルザ、ミラまで一緒に叫んだ。

「以上じゃ！健闘を祈る！」

ちよつと待てー！！！！

「残念だなあ…オレと当たった奴は運が無かったってことだ。ハハハッ」

当の本人は笑ってやがるし！？

「出場者の3人は試験準備期間の間にパートナーを一人決めときな…心から信頼できるパートナーをな…」

パートナー…？

だったら、オレはアイツしかいねえ

クエストに行く時もずっと一緒にいるアイツしかな

「おい、ラッキー!!」

後ろの席で、ネコのくせに肉食ってる奴の名前を言っ。

「やう!ラッキーも燃えてきたよ!」

頼もしいぜ…

「では、私は…」

エルザは、喧嘩しているナツとグレイの方を見た。

まさか…

「ナツにしよう」

なに—————!?

「……え?」

グレイと喧嘩を止め、ナツも変な声を上げた。

「よろしく頼むぞ、ナツ」

へえ…めっちゃ信頼してるんだな…

当の本人はめっちゃ嫌がってるが…

「私はリサーナと組むよ！」

姉妹組みか、意外とコンビネーションとか

よさそうだなあ…

「試験会場はギルドの聖地！天狼島じゃ！！1週間後、ハルジオン港に集合し

試験会場へ向かう！詳しい内容は移動中に話す！」

そう言っつて、マスターはまた奥へ入っていった。

「よっしゃ、ラッキー…修行するぞ…せっかく、選ばれたんだ

絶対、S級なつてやる！」

「やう！」

そう言い、オレとラッキーはギルドを出て行った。

「ナツ！私たちも修行だ！ビシバシしごいてやる！」

「ひええええー！！！」

ナツ…かわいそうに…

「リサーナ！特訓すんよ！」

「うん！ミラ姉え！」

この二人は強敵だな…

ギルドに入つて2年でS級昇格試験に選ばれた！  
はたして、結果はどうなるのか！？

次の話へ続く…

## ギルダーツ（後書き）

次は、S級試験の話を書くよ！

ギルダーツはいつたい、誰と当たるのか！？

楽しみに！

**S級魔導士昇格試験！！（前書き）**

衝撃の参加者発表から1週間過ぎました！

## S級魔導士昇格試験！！

ラッキーと1週間の修行を経て、

ハルジオン港に到着した。

「よっしゃあ…なんか、燃えてきたぞ！」

「ディオス…なんかナツみたいになってきてるよ…」

ラッキーにツッコまれた。

確かに似てきているか…？

…やっぱり、なんかショックだー！

そんな会話をしながら、歩いていると、

前方に船が見えてきた…。

「で……」

目が飛び出した。

「でかーーーーー！！！？？」

そう、前方にあった、フェアリーテイルの船は

かなり大きかった。

その船の前には、エルザ&ナツ、ミラ&リサーナが  
すでに到着していた。

「ディオス、遅かったな。今回は負けんぞ」

エルザが声をかけてきた。この1週間で魔力が

さらに上がってないか？

その横にはナツがいたが…目の下には隈が出来ていた。

どんな修行したんだよ…

「どうやら全員集合したようじゃな」

船の上からマスターの声が聞こえた。

「では、これより試験会場の天狼島に移動する！船に乗れ！」

オレ、ラッキー、エルザ、ナツ、ミラ、リサーナは地を蹴って、

甲板までジャンプした。

船の上はとてもキレイだった。

ホコリひとつ無い…

すると、その時、帆が降り、いよいよ出港となった。



帆にはフェアリーテイルの紋章が描かれていた。

出港してから数時間…

急に暑くなってきた…

ハルジオン港では涼しかったくらいなのだが

どんどん暑くなっていく…

「「あつっう…」「

しまいにはオレとラッキーは情けない声を上げていた。

エルザは水着へと換装していた。

ナツはと言つと…酔っていてそれどころじゃなかった…

「キモチ…悪…」

コッチに来ないでくれるか？

ミラトリサーナはいつの間にか水着に着替えていた。

その時、上の方からマスターの声が聞こえた。

「天狼島には、かつて妖精がいたと言われていた…」

へえ…そんな噂があるのか…

「そして、フェアリーテイルの初代マスター…メイビス・ヴァーミリオン

眠る地である！」

なに！？初代マスターだと！？

名前からすると、女性のような…

その時、マスターが姿を現した。

上はフェアリーテイルの紋章がたくさん入ったハワイアンな服…

下は黒の海パン。そしてサンダル…

「……何だよ、その服！！」「……」

ナツ以外の全員ツッコんだ。

「だつて暑いんだもん」

「……まあ、ごもつとも……」

「では、これより、一次試験の内容を発表する」

ついに、来たか…試験内容！

「島の岸に煙が立っているのが見えるか？」

言われた通り岸の方を見ると、確かに煙のようなものが立っていた。

「まずは、あそこへ向かってもらう」

「そこには3つの通路があり、1つの通路には1組しか入ることはできません」

なるほど…

「3つの通路の内、1つは…ギルダーツへ向かうルートじゃ」

マスターの口がニヤツつとなった…なんか腹立つ…

「残り2つは途中で合流しており、その合流場所で2組が戦い、勝った方が先に進むことができる」

へえ…じゃあ、結局は戦いになるのか。

修行の成果を見せる時かな…

「つまり！一次試験の目的は『武力』そして『運』！」

「……………（『運』で……………）」

ナツ以外、呆然とした。

つまり、ギルダーツと当たった人は運が無かったと…

1週間前ギルダーツも言ってたっけな…

「さあ始めい！！試験開始じゃ！！！」

……………え？

「つて、ここ海の上ですが、マスター！？」

エルザが聞くと、マスターの口がまたニヤツつとなった…

…3つのルート…そして…運……そうか！！

「ラッキー行くぞ！」

「やっ？」

「へ、先に行ってルートを選ぶんだよ！！！」

「やっ！そういうことか！」

納得したと同時に、ラッキーは能力系『アヒリテイけいエーラ翼』を

発動させ、翼を作った。

「お先に〜〜！！！」

とオレはラッキーに掴まって、先に島へ飛んで行った。

「くっ、ディオス！…ナツ！いいかげんに覚める！！」

ガン！とナツを蹴って（ひでえ…）ナツのマフラーを掴んで海へとダイブ…

「リサーナ！行くよ！」

ミラはサタンソウルを使い翼を生やした。

リサーナはテイクオーバーで鳥になり、二人とも空を飛んだ。

そして、ついに一次試験が始まった。

ラッキーのおかげで一番乗りで島に上陸したディオス…

「なっ…なんだこの島は！？」

着地した途端、オレは驚いた。  
島全体からもすごい魔力を感じたからだ。

「すごい魔力だね…ディオス」

ラッキーも感じているらしく、体が震えている。

「…よし、行くぞ！ラッキー！」

「やうー！」

オレとラッキーは急いで煙上がっている方向へ向かった。

そして、煙のもとにたどりついた。

マスターの言っていた通り、3つの穴があり、それぞれが

通路になっているようだ。

この3つのうち1つはギルダーツへ続く道…当たりたくねえ！

穴の上には魔法文字で

『A』

『D』

『E』

と書かれていた…なぜA、D、E？

普通はA、B、Cじゃねえか？

と考えている時、後ろの方から走る音が聞こえた。

どうやら、他の2組も上陸したようだ。

「よし！Aに行くぞ！」

「え！？なんでA！？」

「なんとなくだ！！」

「えー！？」

適当に会話を終わらせて、オレはAの通路に入っていった。

薄暗い中、進んでいくと、やっと広くなった。

「…ギルダーツとか…いないよな…」

ボソリとラツキーに聞いてみた。

「分からないよ…とりあえず少し進んでみよう…」

「…そうだな…」

ちっちゃい声で会話を終え、

少し、進んでみた。

すると…前方に影が見えた…

まさか…

茶色のブーツ…

黒いズボン…

ボロボロのマント…

口元にはうっすらと髭が生え…

いくつもの戦いを潜り抜けてきたことで恐ろしいほどの  
気迫に満ちた目…

茶色の髪…

悪い予感は的中した…

「よお…ディオス…」

「……………うっ…」

「運が無かったなあ…」

「やう…終わったあ…」

悪い予感は的中した…だが、なぜか、オレの心はさらに  
燃えたぎった。完全にナツと一緒になっちまったようだ。

「ラッキー…」

「やう…?」

「おかしいな…なんか、オレ、絶望を微塵も感じてねえ…」

「え…?」

「胸が高まってよお…止められねえよ!…」

「ディオスが完全にナツ化した!…」



ラッキーが驚愕してメチャクチャに飛び回った。

「ギルダーツ！！勝負だ……」

「へえ」

少しギルダーツも面食らったようだ。

ディオスvsフェアリーテイル最強の男ギルダーツが始まるうとじていた。

**S級魔導士昇格試験！！（後書き）**

次、ディオスvsギルダーツです！

そういえば、読まれた回数が1000回超えてました！

ありがとうございます！

## ディオスvsギルダーツ！（前書き）

さて、ディオスの技はどれくらい、ギルダーツに通用するのか！？

ディオスvsギルダーツ！

「行くぞ…ギルダーツ！！」

「完全にナツになってるな。ナツと同じ顔で言われると

もう、ナツにしか見えん…」

それを言うなーっ！！

「神速しんそく！！」

シュン！！

という音とともに消えた。

この2年の間に『神速』の速度はさらに上がり、マッハ3→4に等しい速度になっていた。

「ほう…」

ギルダーツも少し驚いたようだ。

オレは、そのギルダーツの後ろに移動した。

「（すげえ…後ろ姿だけでも、とんでもねえ気迫…って怖気づいてる場合

「じゃねえな…いくぜー!!」

「神竜の…」

ギルダーツはまだ後ろを向いている。

「鉄拳!!」

と拳を出したが…少し体をひねるだけでかわされてしまった。

だが…まだまだ!

「鉤爪!」ビュッ!

「碎牙!!」ヒュン…

「鉄拳!」シュッ…

全部かわされた…完全に遊ばれてる…

「なら…これでどうだ!!」

オレは一回後ろに退き…息を吸い込んだ。

「神竜の…咆哮!!」

火、水、風、土の渦巻いたブレスに鉄の刃が混ざり、旋回する風と雷が纏った。

ナツとは比べ物にならない特大の咆哮だ。

「へえ…さすが…ナツの兄だけのことはある…少しはやるじゃねえか…」

ギルダーツは手を前に出しながら口を開けた。

「神の滅竜魔導士よ…」

その時、オレのブレスが急にバラバラになった…

オレはとっさに何かヤバイものを感じて、ブレスを止め、

高くジャンプした。

すると、オレがさっきまでいた所がバラバラに『分解』した。

「（なんて魔法だよ！）」

改めて、ギルダーツの魔法の怖さを思い知る…。

しかも、ブレスまでバラバラにしゃがるなんて…

最強って言われる理由がわかる。

オレは着地すると、また戦闘態勢を取った。

ホントに、恐ろしい男だと思った…

オレはさっきから動き回ってるのに、ギルダーツは

『一步』も動いていない…

「これが最後の攻撃だ…行くぞ！」

また、神速でマツハの速度で移動した。

そしてギルダーツの真正面へ来た。

「えっ！？真正面から行くなんて！何を考えているんだよおディオス！」

ラッキーが何か言っているが、ここはスルー！

「神の名の下に命ずる！全ての竜の力、我が右手に集え！」

オレが唱えると、全ての元素がどこからともなく現れ、上に突きだした

右手に集まっていく…そして全ての元素が渦巻く特大の球が生まれた。

この光景に、先ほどまで笑みを浮かべていたギルダーツの口が開かれた。

「神竜の…!!」

ギルダーツがマントを前に構えた。

完全に防御の構えだ。

「轟拳!!」

と同時に特大の球をギルダーツに向けて放った。

ギルダーツの体を包み込み…そして…

ドツゴオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

大爆発が起き、天狼島全体を揺らした。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

全魔力使いきつちまった…ヘトヘトだ…

ラッキーは爆風で吹っ飛んだが、大丈夫みたいだ。

さて…おそらくギルダーツには直撃したはず…

と煙が晴れるのを待った。

そして徐々に煙が晴れて行く…

その煙の中に大きな影が出来た。

アレを喰らって…立ってられるなんて…

ラッキーも驚いていた。



「そんな！アレはディオスの全魔力を込めた一撃だった！！  
それなのに、全然効いてないのか！？」

ギルダーツの羽織っていたボロボロのマントが

さらにボロボロになった…それだけだった。

だが、オレはあることに気づいた。

「いや…よく見るよラッキー…」

「え？」

「ギルダーツを…最初の位置から動かしたぞ…」

やべえ…もうフラフラだ…

「そついえば！たしかに！」

そつ、ギルダーツは今の一撃で、2メートルほど後方に下がっていた。

いままで、どんな攻撃しても動かなかったのに…

「大したもんだ…ここまでやるとは思わなかった…」

ギルダーツも少々驚いているようだ…

「だが、もうフラフラのようだな」

ギクツ…！

「まだだ！…まだやれる…！」

ダメだ…威勢のいいこと言ってもフラフラじゃ説得力無いな…

「やっぱ、ナツの兄だ…言うこと全部ソックリじゃねえか…」

ギルダーツはそう言うと、目を閉じた…

「だが、この世は…そんな勢いだけで突っ走れる世の中じゃねえ…」

その時、ギルダーツの足元にある小石が揺れだした。

「お前にもナツにも…オレと同じ魔の道を歩き、その頂にたどり着く為に

足りないものがある…」

ボロボロのマントが浮きあがり、揺れていた小石…いやそこからへんにあるガレキ

全てが浮きあがる…

「それを知れ…！」

そしてギルダーツは目を開いた。

その途端、ギルダーツの足元が砕け、ガレキ全てが宙に舞った。

マント、髪も逆立ち、光が足元から凄まじい勢いで噴き上がる…

そのギルダーツの出す魔力と気迫を感じた途端…

全身に寒気が走った。

「……………！！！！」

もはや、ここだけじゃなく…島全体が揺れるほどの魔力だ。

ビリビリとオレの体を何かが突き抜ける。

「ぐ…お…おお……………！！」

オレの足が震えている…？

いや…足だけじゃない…オレの体そのものが震えている…？

「く…」

気持ちを切り替える！

冷静になるんだ…！

「くっそおおー！！！！」

気づけば、オレは突っ走っていた。

拳を構え、突きだそうとした時…

ギルダーツの目がカッと大きく見開かれた。

その途端…また、体が止まった。

「あ…ぐ…くっ…」

全体から冷や汗が噴き出て止まらない…

そして、オレの心を完全に恐怖が支配した時…

ガクツと膝をついた…

その時、ギルダーツの魔力が収まり、上からは浮き上がったガレキが落ちてきた…

マント、髪も元に戻った。

「……………」

黙ってオレを見下ろしている…視線を感じる…

「ま…参り…ました……………」

その声は震えていて、自分でも聞き取りづらかった…

腕がブルブルと震え…体を支えてられない…

その時、上からギルダーツの声が聞こえた。

「フツ…見事…」

……え…？

「勇気を持って立ち向かう事をオレは咎めたりはしない…  
だが、抜いた剣を鞘に納める勇気を持つ者はことのほか少ない…」

「恐怖は『悪』では無い。恐怖とは己の弱さを知るという事だ…  
弱さを知れば、人は強くも優しくもなれる。S級になるには必要な  
ことだ。」

オレもS級になる時、それを知った。そして…」

「お前も今、ここでそれを知った…合格だ」

そんな…だけど…

「オレは…ギルダーツに…」

「行けよ。試験官が合格だって言うてんだ。だが、試験はこれで終  
わりじゃねー」

「自信を持って。ナツの兄なんだ。お前ならきつとやれる」

「それと、ここからは試験官としてじゃなく…友人としての話にな  
るが…」

「強大な魔力がそいつの全てじゃねえ。だが、超えたいという  
気持ちはオレにもわかる。歳もキャリアも関係ねえ」

「オレも同じで、お前には負けたくねえ」

「また、いつでも勝負してやる！S級になって来い！ディオス」

ギルダーツの話が終わる直前から、オレの顔はすでに涙で濡れていた…

一次試験を『恐怖』を知ったことよって合格した。

次は何が待ち構えているか分からないが、絶対にS級になってやる。

そして、いつか、ギルダーツを超えてやる。

## ディオスvsギルダーツ！（後書き）

さて…ディオスvsギルダーツ終わりました…  
やっぱり小説書くの下手なのかなオレ…

次の話は、ディオスとギルダーツの戦いの横で行われていた、  
もう2組の勝負を書きたいと思います。

お楽しみに！

あ、あとお気に入り登録数が20件超えていました！  
ありがとうございます！

## エルザ&ナツvsミラ&リサーナ(前書き)

さて、激しいディオスvsギルダーツの横で行われていた。もう2組の闘いを書いていきます。



## エルザ&ナツ vs ミラ&リサーナ

エルザ&ナツ サイド

マスターに言われた通り、煙の上がついている場所まで

たどり着くと、3つの通路があった。

「A

「D

「E

なぜ、A、D、Eなんだ…？

その3つの内、Aの通路はすでに塞がれていた。

どうやら、ディオスはAに入ったらしい。

「ナツ、DとE、どっちに入る？」

「Eだ！」

「なぜだ？」

「だって、エルザのEじゃないか、だからE！」

「なぜ、私の名前から取るんだー！」

ゴッ！とナツの頭にお見まいしてから

Eに入っていた。

「結局、Eに入るのかよー！」

ナツは文句を言いながらついてきた…

しばらく、歩くと、広い間に出た。

上を見ると旗があり、『闘』と書かれていた。

「ディオスや、ギルダーツがいないとなると…

私たちの相手はミラ達のような…」

つてことは、ディオスは……ドンマイだ…

「じゃあ、ディオスはギルダーツの所に行っちゃまった

ってわけか」

後ろでナツが声を上げた。それを言ってやるな…

サイドエンド…

ミラ&リサーナ サイド

海岸に着くと、サタンソウルを解いた。

それにつづいて、リサーナも降りてきて、アニマルソウルを解いた。

「さ、急いじうー！ミラ姉え！」

と、リサーナは突っ走って行ってしまった。

「ちょ！リサーナ！」

あわてて追いかけた。

そのまま、煙の上がっている所まで着くと、3つの通路の内、すでに2つは塞がれていた。他の2組に先を越されたい。

「Dしか残っていないか……」

それしか残って無いなら仕方がない。Dをそのまま進むことにした。

リサーナもついてきて、しばらく歩くと広い間に出た。

上を見ると『闘』と書かれた旗があった。

「へえ、闘か。ギルダーツじゃなくてよかったぜ」

「セーフだね、ミラ姉え」

さて、対戦相手は誰かなあ…と目を凝らすと、

2人の影が見えてきた。

「遅かったな、ミラ、リサーナ」

エルザの声が聞こえた。

思わず、グッと手を握った。

「やっと、エルザをボコボコにできる日が来たよ……」

「ミラ姉え……怖い……」

まあ、エルザの横にいるチビは置いといて、

「さっさとおっぱじめようぜ、エルザ……」

「ああ、そうだな……手加減はしないぞミラ……」

「望むところだ」

そう言うと、テイクオーバーして、サタンソウルになった。

「ぜってえ、負けねえぞ！」

「ミラ姉え、やっぱり怖いよ……」

リサーナに怖がられてるが、ここはスルーした。

サイドエンド……

「換装！黒羽くわはの鎧！」

エルザは換装すると、一撃の破壊力を増す『黒羽の鎧』になった。

ミラもすでにサタンソウルになっている。

「いくぞっ!」「

エルザ、ミラは同時に突っ走った。

そして激突した。

「はああ!」

「だあっ!」

「ふんっ!」

「ちっ!」

「ここだ!」

「当たるか!」

今までのようなレベルの低い闘いではなく、本気の闘いだっ

ベシッ!ドカツ!ゴツ!ガッ!バキッ!ベシッ!

「はあああ!」

「だあああ!」

二人の拳が交差し…

ドゴオッ!!

ほぼ同時に顔面に直撃した。

「やるな、ミラ」

「お前もな！」

「なら、これはどうかな！換装！」

「…！？」

「みんじじゅう フォトン スライサー  
明星・光粒子の剣！」

「くっ！ダークエクスプロージョン！！」

エルザの2本の剣から放たれた魔法と

ミラの両手から放たれた魔法が激突した。

バチバチバチバチッ！！

「くっ！」

「ちいっ！」

ドゴオン！！

そのまま爆発した。

「うおお！」

「ぐあっ！」

そのまま二人は吹っ飛んで壁に激突した。

「「すっごい……」」

お子様2人は見学状態だった。

「「って、戦えお前達！（テメー等）」」

起き上ったエルザとミラがツッコんだ。

「「ごめんなさい！！」」

泣きながら謝った…

その時、急に大きな爆発音がどこかから響き、

地面が揺れた。

「「「「な、なんだっ！？」」」」

4人ともビックリする。

「「これって……」」

「「ギルダーツと……」」

「「ディオスの方が？」」

「「いったい、どんな闘いやってるんだ？」」

リサーナ、エルザ、ミラ、ナツの順で言った。  
すると、揺れが収まった。

その途端、また4人は向き合った。

まずは、ナツとリサーナが仕掛けた。

「いくぞお！リサーナー！！」

「負けないよ！ナツ！！」

拳が交差し…

ドガッ！！

「ぶっ！」

「べっ…」

ドサッ…2人同時に気絶…

「「えー！ー！！？？決着早っ！？」」

その光景にエルザ、ミラがツッコんだ。

「「でも…ってことはあとは…」」

「「私たちがーっ！！！」」



それで納得かい!?

「換装!天輪の鎧!」

エルザは天輪の鎧へと換装した。

「絶対に勝つ!エルザア!!」

両手に闇の球を作りだしたミラ。全魔力を放つようだ。

「循環の…」

「ソウル…」

「剣!!」

「イクステイクタアー!!」

回転する多数の剣と闇の波動がぶつかりあった。

そして…

ガギギギギギギギギギギギツ!!!

エルザの技が闇の波動を切り裂いて、

ミラに直撃した。

「な……に……魔法……を……」

宙を舞いながら、サタンソウルが解けた。

どうやら、ミラも気絶したようだ。

ズザアア…

「ハア…ハア…私の…勝ちだ…ミラ…」

勝者…エルザ&…ナツは勝ったのか？

「ナツ！いいかげんに起きろー！！」

ゴツー！！

「ぎゃあー！！」

頭に大きなたんこぶを作りながらナツが起きた。

「あれ…エルザ…勝ったんだ…」

「ハア…」

先が思いやられる…。

と、その時、急にまた地面が揺れだした。

しかも、今度は長くて大きい。

「な…なに、コレ！？」

ナツが絶句している。

理由はすぐに分かった。

「魔力だ…。それも、とんでもない大きさのな…」

「じゃあ…ギルダーツの？」

あのオヤジ以外考えられなかった。

「まだ、続いていたのか、ディオスとギルダーツは…」

あのギルダーツに、ここまで持ちこたえるなんて

もしかするとディオスも化け物なのかもしれない。

そして、しばらくすると、揺れが収まった。

「終わった…のかな？」

ナツが聞いてきた。

「分からない…とりあえず、先に進む。道も開いてるしな」

そう言って、エルザはスタスタ歩きだした。

「あ！待てよおー！！」

ナツもあわてて追いかけた。

さて、この後は二次試験だ。

いつたい、どんな試練が待ち構えているのか分からないが、

絶対、S級魔導士なってやると思う、エルザであった。

**エルザ&ナツvsミラ&リサーナ(後書き)**

さて、二次試験は何が待っているのか…  
は次回のお楽しみです(笑)

## 二次試験（前書き）

さて、一次試験を突破した  
ディオス、エルザ、ナツ。  
次は二次試験開始です！！

## 二次試験

エルザ&ナツ サイド

ミラ&リサーナとの激闘を終え、開いた通路を進む。

すると、明るい間に出た。そして、そこには

マスターが待っていた。だが、目を凝らすと…

マスターの後ろの岩に座っているディオスを発見した。

まさか…

「ふむ。勝ったのはエルザとナツか」

マスターが声を上げた。

そんなことよりも、ディオスがいる方が気になる。

「エルザ&ナツは『闘』でミラジエーン&リサーナを撃破し突破…」

「ディオスはギルダーツの試練を見事突破…」

「嘘だーーーーー!!??」

ナツも同時に驚愕の声を上げた。

「では、これより二次試験を始める!!」

て、話終わりかよ！

それも休憩無し！？

そんなこんなで二次試験が始まるうとしていた。

サイドエンド

「それじゃ、二次試験の内容を説明しよう……」

まさか、この状態でエルザ、ナツと戦えっと言うん

じゃねえよな……

さすがにあの時、全魔力使ったせいで……全然無いぞ……

「二次試験の内容は……フェアリーテイル初代マスター

メイビス・ヴァーミリオンの墓を探し、たどりつく事じゃ」

「……え？」「」

オレ、エルザ、ナツが素っ頓狂な声を上げた。

「制限時間は6時間！ワシは先に墓の所に行き待っておる！では

スタートじゃ……」





「一次試験の通路？」

「やう。だって通路の入り口にあった英語ってなんかおかしかったじゃん」

言われてみれば……

A・B・Cでいいはずなのに、なぜかA・D・Eだった……

「とりあえず、あの3つの通路の所に戻ってみようよ」

「…そうだな……飛ばすぞラッキー」

ラッキーに言われた通り、煙の上がっていた所まで戻ることにした。

オレが言つとラッキーはまたリュックの中に顔を引っ込めた。

「神速しんそく！」

マツハ4の速度で数秒で煙の上がっていた場所までたどり着いた。

そして、手ごろな岩を見付け腰かけ、3つの通路をじーっと眺めてみた。

「ヒントねえ……」

「やう…さっぱり分からないよ……」

ラッキーがリュックから顔を出した。

「メイビスの墓…制限時間…6時間…」

マスターの言っていた言葉を少し思い出してみる。

すると、突然、ラッキーが声を上げた。

「あー!!」

「どうしたラッキー!?何か分かったのか!？」

「3時のおやつ、まだだった!!」

「そっちかよ!!!!!!」

こんな時に食う事しか考えていないラッキーに呆れた…

リュックの中からお菓子を取りだして食い始めたラッキー…

ホントよく食うよなコイツ…

すると、またラッキーが声を上げた。

「ディオス、もしかして試験の内容自体がヒントなんじゃない?」

「なぜ、そう思うんだ?」

「だって、ヒントも無しに、この島にあるメイビスの墓を探せなんて

言われたら絶対6時間以内なんて無理だよ?」

言われてみれば、確かにそうだ。

マスターはただ、6時間以内にメイビスの墓を見付けろとしか言っていない。

しかも、ラッキーの言つとおり、この島の中からメイビスの墓を見付けだせ

なんて無理な話だ。だとすると、この試験の内容自体がヒントだとしても

おかしくない…

「墓…6時間…」

試験の内容を基にもう一度考えてみる…

その時、ラッキーが声を上げた。

「ディオス、もしかしたら『6』ってというのは文字数なんじゃないかな？」

「文字数？」

「やう。だって『墓』ていうのと『時間』をヒントだとして考えてみると

いくつだって言葉が思いつくよ？」

さすが、たくさん食べているだけあって、頭の回転が早いようだ…

栄養つてのも大事なもんだな…

「それと、このA・D・Eっていう英語…」

「これらすべてから考えると、『暮』と『時間』から考えられる言葉

英語にしたとき、『6文字』になるのを探せてことだよ」

「ラッキー…」

オレは気づかぬうちに声を上げていた。

「やう？」

「…やっぱ、お前と組んで正解だったぜ！」

「やうー…！」

ホントにそう思った。まさか、こいつがこんなにも頭良かったとは思わなかった。

「あ…！」

その時、ラッキーが声を上げた。

「どうしたラッキー？ついに分かったか？」

「やつ。あつたよ…暮、時間から思い当たる言葉で、英語に直すと6文字になるやつが！」

「すげえじゃねえかラッキー！」

まさか…こんなに早く思いつくななんて思わなかった。

「その言葉っていうのはね…『終焉』…つまり『demise』だよー」

「demiseか…って事は…」

demise…の中には『D』と『E』が含まれてる…それに

『E』だけは他のアルファベットと比べて2回使われている仲間はずれ…

そして3つの通路のA、D、E…

もう、答えは決まった！

「「答えは、『E』の通路だー！」

オレとラッキーは同時に声を上げていた。

「そつと決まりや、行くぞ！ラッキーー！」

「…ちー！」

ラッキーは急いでリュックの中に入った。

そして、オレはそのリュックを背負って、Eの通路に入って行った。中に入ると、ミラとリサーナがいた。リサーナは頬のキズ以外ほとんど

無いが、ミラはひどいケガだ。

「ミラ…大丈夫か？」

駆け寄って、声を上げた。

「……ディオス？…なぜ…こんなところに…？…っ…！」

「しゃべるな！今、治療する」

体質を『天竜』に変更……魔力は休んでいる間にかなり回復した…

ミラに両手をかざすと、治療魔法を使った。

「キ…キズが…」

ミラの体にあったキズがどんどん癒えていく…

そして、しばらくすると完全に消えた。

「……ふう……やっぱり治療魔法は魔力半端無えや…」

回復した魔力もまた、空に近くなった。

「…すまない…ディオス…」

「い…!?!」

ミラがこんなこと言うなんて思いもよらなかった。

「しかし、ディオス、なんでこんなところに来たんだ？」

「あ…ああ、オレ、今、二次試験やってるところで、その二次試験の答えが分かったから、向かってる所だったんだ」

「なに…!?!」

ミラがすんげえビックリした…。

「じゃあ、お…お前!…あのオヤジの試験…突破したのか!？」

「あ…ああ…」

結果は大敗なんだけどな…

しばらく、ビックリした表情のミラだったが、すぐに元に戻った。

「あ…ビックリした…。まあ、いいや。とりあえず助かったデ  
イオス…」

試験の途中なんだろう…行ってくれ」

「ああ…気をつけて船に戻れよミラ…」



そう言うと、オレはまた進んで行った。

「…ナツみてえにかわいい奴だけど…いいところあるもんだな…」

ディオスの後ろ姿を見ながら、ボソリとつぶやくミラであった。

「治療魔法でだいぶ魔力減っちゃった…『神速』はまだ使えねえな…」

走りながら、ディオスは自分の魔力の状態を確認していた。

しかし、オレって魔力無さ過ぎだろ…

そう思っていると、二次試験の開始場所に出た。

すると、あることに気付いた。

開始直後は何も無かったのに、今はなぜかアルファベットが並んでいた。

左『A』

中『D』

右『E』

…「丁寧な事で…」

そう思いながらEの通路を進んだ。

ほとんどまっすぐな道だったので迷う事は無かった。

数十分くらい走り続けると、いつの間にか島の中央にある大きな樹のすぐそばまで来ていた。確か、マスターは『天狼樹』と

言っていた。改めて見ると、その大きさがよくわかる。

そうして、走って走って走り続けると、ようやく広い間に出た。

もう、天狼樹の根元だ。そして…

「なんと…先にたどり着いたのはディオスじゃったか…!?!」

藁でできたかまくらに不思議な形をした墓があり、その墓の前に

マスターが座っていた。…だけど…

「呑気に酒飲んでんなよ!!」

思わずツッコんだ。

「まあ、堅い事を言わない言わない」

頼れるマスターだけど…こういうのを見ると呆れちゃうわ…

「とりあえず…二次試験クリアじゃ…そして」

「S級魔導士昇格試験合格じゃ!」

思わず両手を握りしめ…

「…よっしゃー！ー！ー！ー！！！」

と叫んでいた。マジで嬉しかった。

この試験の出場者の中に選ばれた時も嬉しかったが、

それ以上だった。

マスターも微笑んでいた。

すると、その微笑みも消え、真剣な表情になった。

「では、S級魔導士になる事と…お主のその力…心…魂…全てを見込んで…」

お主に、ある『魔法』を授ける…」

……………なんですと！？

「ある…魔法…？」

「うむ…その魔法の名は…『フェアリー妖精の法律』！！！」

「フェアリー……ロウ…」

聞いたことの無い魔法だったが、ギルドの名を冠する魔法名だとすると

おそらく、かなり強力な魔法なのだろう…。

「フェアリーテイル…三大魔法の1つ…超絶審判魔法『フェアリーロウ』」

「ギルドの三大魔法!?!」

思わず驚いた。

「今から、お主に見せよう…!」

そう言うと、マスターは両手を胸の前に持ってきた。

不思議な構えだ。

すると、その両手の間に球ができた。恐ろしいほどの

魔力が詰まった球だ。

そして、両手を合わせた。

すると、いつの間にか空に集まっていた雲の中央にポツカリと穴が

開き、魔法陣ができた。その魔法陣の中心にはフェアリーテイルの紋章が

ある。そして、天狼島全体が優しい光に包まれた。眩しかったが、とても

暖かい光だった…。そして、徐々に光は薄れていき、空も元に戻った。

すると、マスターが口を開けた。

「この魔法はな…術者が敵と認識した者だけを討つ魔法なのじゃ」  
な…なんて強力な魔法…

つまり、マスターがオレを敵と認識していたら、オレは…逝ってたのか…

「では、手を貸しなさい…」

言われた通り手を差し出すと、握られた。

その途端、何かが手からオレの中に流れ込んでくるかのような感覚がし、

全身が震えた。

「がつ…ぐつ…」

数秒、恐ろしいほどの苦しみに耐え、手が離されると、その苦しみも消えた…

「お主なら、この魔法を正しい方向に扱えると信じておる…

これからも、よろしく頼むぞ、ディオス…」

「…はい…」

いつの間にか声がかすれていた。

「では、戻るかの…ギルドに…おっとその前に…」

「ディオスよ、そこにあるのがメイビス・ヴァーミリオンの墓…

お参りしておきなさい…」

「わかりました…」

言われた通り、メイビスの墓の前まで行き、両手を合わせ、目を閉じた。

しばらくしてから、目を開けた。

すると、一瞬だけ、少女の姿がチラッと見えたような気がした。

瞬きをして、よく見てみる…。

だが、特に変わった様子は無かった。

「（気のせい…なのかな…）」

…そう思うことにした。

その時、マスターの声がした。

「これ、何をしておる。置いてゆくぞ？」

ひでえ！？これがホントにマスターかよ！？







## 二次試験（後書き）

無事、二次試験をクリアしたディオス。

え？試験の内容が原作と全然変わらなくてつまらない？

……そこは勘弁して下さい……；；

リサーナ…死す…（前書き）

S級魔導士になり、3年経過した…という設定。  
3年の間に、エルザとミラもS級になりました。

リサーナ…死す…

S級になってから3年が経過した…

オレは14歳になり、かなり身長も伸び、

体もたくましくなってきた。

エルザとミラもS級になっている。

そして、新しく、ミストガンという男も入り、S級になった。

顔を隠しているため、見てみたいなあ、と時々思ってしまう。

ナツも、あの時と比べればものすごく成長していて、魔力も

かなり高いが…まだまだだ。

めずらしく、グレイと喧嘩しておらず、リサーナと楽しそうに

話している。なんか、良く見るとお似合いの二人だ。

そういえば、少し前に知った事だが、リサーナは、オレとナツの

1歳上らしい。S級の時はまだ、子供だったが、たった3年で、

もう大人じゃないかと思うほどの性格になった。思うが、このギルドの

女はスタイル良すぎじゃないか？

ミラの弟でリサーナの兄にあたる、エルフマンはいつものように学ランだ。

どうやら16歳らしいが、勉強が嫌いらしい…

そんな様子を、ラッキーと一緒に肉を食いながら、見ていたが、今日は

なんか、嫌な気分だった…

そう…なんか不吉な事が起こりそうな予感がしてたまらなかった。

そんなことを考えていたとき、ミラが声を上げた。

「おーい…エルフマン、リサーナ、クエスト行くぞー…！」

と、S級クエストの依頼書を持ちながら言った。どうやら、近頃、

この近辺に現れる『ザ・ビースト』というのを討伐してほしいという依頼らしい。

「わかったよ、姉えちゃん」

とエルフマンが準備をし、

「はい、ミラ姉え」

とリサーナは最初から準備をしていたらしい。

そして、エルフマンが準備を終え、いざ、出発という時に、  
ナツが声を上げた。

「おい、リサーナ…オレも連れてってくれよお…」

どうやら、一緒に行きたいらしい。

だが、リサーナは

「ダメ。…いくらミラ姉えがS級でも、3人は守りきれないよ」

と言った。確かに、その通りだ。2人ならともかく、3人を守ると  
なると、

かなり難しい。それにミラは1年前にS級になったばかりだ。

「いいよお…自分の身は自分で守るからさあ…」

どうやら、ナツはどうしても行きたいらしい。

「ダメって言ったらダメ」

リサーナも譲らないらしい。

ホント見てて思うが、めっちゃお似合いな2人だ。コイツら…

「だけどね…」

そこで、リサーナは口を開けた。

「もし、今後、ナツがS級になる時が来たら、パートナーになってあげてもいいよ…」

おいおい…思いっきり告白じゃねえか…

「……おう…」

どうやら、ナツは納得したらしい。

というか、そんなんで納得するんかい。

「じゃあ…いつてきます！」

とリサーナは言って、右手を上げて、人差し指を突きあげた。

それを見たナツも笑って、同じように人差し指を上げた。

すると、リサーナはミラとエルフマンの後を追って行って、姿が

見えなくなった。

だが、この時、オレは激しく後悔した…。もし、オレと一緒に行ってたら、

あんな結果にならなかったかも知れない…と…

そして、その時はやってきた…

日が落ち、そろそろ暗くなってきた時、ギルドの扉が大きな音を立てて開き、

メンバーの1人が息を切らしながら、戻ってきた。

そして、声を上げた。

「た…大変だ…ミラ達が…」

その話を聞いた途端、オレとナツは急いで、その男の所に近づき、詳細を聞いた。

「なんだ！？何があった!?!」

「ハア…エルフマンが…ミラ達を守ろうとして…『ザ・ビースト』を…」

ぜんしんダイクオーバー  
全身接収したんだ…だけど失敗して…そのまま…

暴走し始めたんだ…」

それを聞いた途端、オレは昏間感じた、不吉な予感が的中したとすぐに感じた。

「場所は!?!?!今、ミラ達はどこにいる!?!」

ナツが声を荒げた。

「ハア…東の…荒れた岩場…近くに森がある所だ…」

それを聞いた途端、オレはナツに声をかけた。

「ナツ！掴まれ！すぐに行くぞ！！」

「ああ！！」

ナツはオレの右手をしっかりとつかんだ。

それを確認すると、オレは『神速<sup>しんそく</sup>』を使った。

3年の間に『神速』の早さはマツハ6ほどにまでなっていた。

ズバアアン！！という大気を揺るがす大音響を出して突っ走り、東に向かった。

そして、数分で目的の岩場にたどり着き、ミラ達を探した。

そして、見つけた。体全体にキズがあつて苦戦しているミラと、そのミラに

駆け寄るリサーナ。そして、その後ろには…

以前の面影など全く無くした、獣化したエルフマンがいた。右目の下の傷が無ければ

エルフマンに思えない。

その時、リサーナが、エルフマンの前に出た。

バカ！！何を考えている…！！！！





「……!?」

「早く行ってくれ!! オレはエルフマンを食い止める!!」

「だけど…あんた1人じゃ…」

「こんな奴、オレ1人で十分だ!!」

オレは気づかぬ間に声を荒げていた。

ミラとナツが少し驚いたが、すぐに戻った。

「…分かった……エルフマン…任せたよ!!」

そう言うと、ミラは森の中へ入って行った。

「ディオス…死ぬなよ…!!」

ナツも続いて入って行った。

それを確認すると、エルフマンの方を向いた。

「…完全に…暴走してるな…」

もはや、理性など微塵も残っていないと判断した。

「…お前…今、ぶっ飛ばした奴…誰だか分かってんのか?」

「…たく……何を聞いてるんだオレは?…理性もない奴に話しかけて

どうする？

「妹だよ……お前のな……リサーナだよ……」

その時、また、右手を振り上げたエルフマン……

「……お前は……」

そして、その右手がオレに向かって振り下ろされた。

「お前は……！！」

オレは、その攻撃を『左腕だけ』で受け止めた。

足が地面にめり込み、クレーターができた。

そして、オレは左手でエルフマンの右腕を掴んだ。

そのまま、握りつぶすかのような勢いで力を込める。

「お前は……自分の妹を！家族を！傷つけたんだぞお……！！」

左手だけで、エルフマンの体を持ち上げ、思いっきり、放り投げた。

「グオオオオオオツ……！！」

雄叫びを上げながら、吹っ飛んでいく。

そのまま200mは吹っ飛んだか……

だが、そんなことは気にも留めてなかった。

「だあああああつ……!!」

『神速』でエルフマンの近くまで行くと…

「神竜の…鉄拳……!!」

ドゴオツ!

「鉤爪……!!」

バキィツ……!!

「翼撃……!!」

ドツゴオツ……!!

「碎牙……!!」

ベキィツ……!!

と、滅竜魔法を次々と打ちこんだ。

痛みで、さらに雄叫びを上げているエルフマンだったが、攻撃はやめなかった。

「オレは……!!昔……絶対に……『仲間を守る、絶対に死なせない』と自分自身に約束した……!!」

殴り続けながら、聞こえていないと分かっているにもかかわらず、オレは声を上げていた。

ドゴツ……!!ガツ……ゴツ……!!ベシィツ……!!

「約束したああ……!!……!!……!!」

ドツゴオオツ……!!……!!

全力の『神竜の鉄拳』でエルフマンの体を撃ち上げた。

「神竜の……!!」

そのまま、息を思いつきり吸い込んだ。

そして…

「咆哮!!!!」

超特大のブレスを放った。

地面を砕くほどの勢いで、エルフマンに向かっていく。

そして、そのまま全身をのみ込んでいった。

「グウオオオオオオオオオオオツ!!!!」

その途端、一番大きな雄叫びを上げて、姿が見えなくなった。

ブレスはそのまま空高く昇って行き、見えなくなった。

エルフマンは、かなり遠くの方で、落ちていく姿が見えた。

気絶したようで、テイクオーバーも解け、元の姿に戻っていた。

「……神速……」

『神速』でエルフマンの落下地点のどこまで行くと、受け止めた。

そして、声を上げた。

「……さ、行くか…リサーナのところに……」

エルフマンの体を担ぎ、オレも森の方に向かって行った。

森に入り、歩き続けると、ようやくリサーナのそばに座る

ナツとミラを見つけた。

エルフマンをおろして、近くに駆け寄る。

リサーナの目の焦点が合っていない…このままじゃ命が危ういが、

魔力は先ほどの闘いで、かなり使ってしまった…

「ミラ…姉え…」

その時、リサーナが声を出した。

ものすごく、苦しそうだった…こんな時、何もできない自分に猛烈に

腹が立った。

「ミラ…姉え…ど…ど…ど…」

くっ…どうやら意識がほとんど無いようだ…

『神速』を使っても…間に合わんか…

「ここだ…!!…リサーナ…!!」

リサーナの手を握りしめて、ミラが声をかける。

すると、リサーナがミラの方を見た。

その顔は……笑っていた……

「ミラ姉え………」

リサーナがそつ口にした途端、左肩にあるフェアリーテイルの紋章が粒子になって消え始めた。と同時に、リサーナの体もだんだん、粒子に

なって消えて行く……！

どうなっているんだ！！??

「リサーナ！！どうしたんだオイ！！」

ナツが声を上げる。

「リサーナ……！嫌だ……！消えるな……！リサーナ……！」

ミラの顔はもう涙でグシャグシャになっていた。

オレはただ、見つめることしかできない……

そして、ついに、リサーナの体が完全に粒子となって消え去った。

「リサーナ…リサーナー…!!!」

ミラが何度も連呼するが、もうリサーナの姿はどこにも無かった…滅多に泣く事が無いナツでさえ、その目に涙が溜まっているのが見えた。

そして思った…結局…オレは……また、仲間を救えなかったと…

…そう、思っている時、ミラがオレの胸に顔をうずめてきた。

おそらく…心のより所が欲しかったのだろう…

そして、そのままずっと泣き続けるミラをオレは抱き締めることしかできなかった。いつの間にか、オレまで涙を流していた…。

久しぶりに泣いた気がする…

その後、数分の間、ミラは泣き続けた。

その間、ずっとオレはミラを抱きしめていた。

そして、しばらくして泣き止むと「帰ろ…」と言って、

立ちあがった。オレはエルフマンをまた担いで、ミラの後を

追った。ナツはと言うと、リサーナが消えた場所で立ち尽くしていた。



今は声をかけない方が良くと判断して、ギルドに戻った。

ギルドに戻るとミラと共に、マスターに報告した。

その報告を受けると同時に、ギルド全員が一斉に涙を流して、

リサーナの死を惜しんだ。そして、数日後に『遺体の無い』葬式が行われる

事になった。報告が終わると、ミラは家に向かって歩き始めたが、途中で

膝を付いてしまった。駆け寄ると、また、泣いていた…

オレは少し考えると『神速』を使って、エルフマンを先にミラの家に届けた。

そして、またミラの所に戻ってきた。

そこで、また考えて、ミラに背中を向けて、しゃがみこんだ。

「…乗りなよ…家まで送る…」

そう言うと、ミラは何か、オレの背中にもたれかかった。

そして、オレは立ちあがると、歩き始めた。

肩がミラの涙で濡れたが、気にも留めなかった…

しばらく歩いて、家に着くと、1階の奥の部屋へ進んだ。

昔、よく遊びに来たことがあるから、どこが誰の部屋だか知っていた。

部屋に入り、ミラをベッドに降ろした。そこで少し考え、

今は…1人にさせておいた方が良さそうと思い、ギルドへ帰ろうとした時、

腕を掴まれた。

振り向くと、ミラがガツチリ、オレの腕を掴んでいた。

すると、ミラが声を上げた。

「ごめん…気持ちが悪くまで…落ち着くまで…一緒にいて…」

部屋に男女2人きりと言うのは、少し抵抗感があったが、

こういうときは、そんなのに構ってられなかった。

そして、結局、ミラが寝るまで、一緒にいることにした。

そのまま、数十分くらい、経っただろうか…？

ベッドに横になっていたミラが、目を閉じて、やっと眠りに落ちた。

どうやら、少し落ち着いたらしい…

風邪を引くとヤバいので布団をかけて、オレはミラの家を後にした。

しばらく、歩いていると、前方にナツの姿が見えた。

地面に座り込み、顔をうずめていた。

「こんなところで、何してるんだナツ？」

近寄って声をかけた。

が、返事はなかった。

そういえば、数日後に葬式があることを伝えてなかったので

伝えることにした。

「…数日後に…リサーナの葬式が行われる……場所はカルディア大聖堂だ…」

聞こえているか分からなかったが、そう伝えると、オレは自分の家に戻って行った。

家に着くと、ベッドに横になった。

すると、堪えていた涙が次第に溢れだした。ラッキーの方を見ると、すでに寝ている…。

「…くそっ…」

気づかぬ間に声を上げていた…

「オレは……非力だ……！」

今回、何度目かすら分からない、自分の無力さに苛立ち、そして悔んだ。

そして、溢れ続ける涙を止めることができなかった…

その後、いつ涙が止まったのかすら知らないまま、眠りに落ちて行った。

リサーナ…死す…（後書き）

さて…リサーナの死を少しアレンジして書いてみました。

もうお分かりかもしれませんが、

ディオス×ミラジェーン

ナツ×リサーナ

と言った感じで今後なって行くと思います。

次はリサーナの『遺体の無い』葬式を書いていきます…

## 遺体の無い葬式（前書き）

さて、遺体の無い葬式が始まります。  
リサーナがいなくなつて3日後です。

## 遺体の無い葬式

リサーナがいなくなつて、3日後…葬式が行われた。

もちろん、あの時、リサーナの体は粒子となつて消えてしまったので

遺体は無い。なぜ、消えたのかは、原因不明…

周りを見ると、ほとんどの人が泣いていた…

だが、それは当たり前だ…ギルドの…否…家族の1人が亡くなったのだから…

不思議な事にミラは涙を流していなかった。だが、エルフマンは

号泣していた…おそらく、他の誰よりもつらいだろう…

自分の妹を、あの『ザ・ビースト』を操れなかったせいで殺してしまつた

のだから…

ナツはと言うと、葬式に出席したには、したのだが、途中でどこかに行つてしまつた。

…そして、オレは自分の力の無さをまだ悔んでいた…

あの時、もっと早く来ていれば…いや…不吉な予感がした時点で、あの3人を止めて

いれば……そう考えているうちに、オレは泣いているのに気付いた……  
止めようと思っても止めれなかった……

マスターが何かを語っているが、ほとんど耳に入らないまま……葬式は終わった……

マスターと、他のギルドのメンバー達はほとんどの人が泣きながらギルドへ戻って

行った。……残ったのは、オレとエルフマンとミラだけだった。

エルフマンはリサーナの墓の前でガクツと膝をついた。

「……オレの……オレのせいだ……リサーナ……は……うう……」

いや違う……お前のせいじゃない……オレが悪かったんだ……

墓の前で泣いているエルフマンを見ながらミラが声を上げた。

「エルフマン……あなたのせいじゃないよ……生きているものは……いつか

必ず死ぬんだ……」

「リサーナが言ってたじゃないか……死んだものは生き返らないけど

その人の事を思っていれば、心の中でずっとその人は生き続けるんだ……って」



そう言つと、また泣き出したミラ……

オレは、エルフマンに少し言いたい事があつたので口を開けた。

「エルフマン……」

「……？」

「言いたくはないが……リサーナは死んだ……『これ』が現実だ……。ミラの言つた

通り、『生きているものは、いつか必ず死ぬ』。……お前は今回……ミラもリサーナも

守れなかった……。……だから、いつか、またミラに危機が訪れたら……守つてやれ。

他のメンバーの誰かじゃねえ、『強くなつたお前』が守つてやれ……いいな……」

「……うん……分かつた……。……絶対に守る！今度こそ絶対に……！」

エルフマンは涙を拭つて、しっかりと答えた。

それを見ていた、ミラがまた大泣きしだして、膝をついた……

……やれやれ、世話が焼ける……

オレはそう思いながら、手を差し出した。

ミラは泣きながら、その手を掴んできた。

グツと力を込めて、ミラを立ち上がらせた。

立ち上がったとたん、ミラがまたオレに抱きついてきて、そのまま胸で

泣き続けた。オレとエルフマンは顔を見合すと苦笑いした。

そのまま、泣き続けるミラに付き添って、家まで送った。

家についても、なぜか、ミラは一向に離れようとしなかった。

「どうしたんだ？ミラ…？」

「やう…ディオスって、やっぱり鈍感だね…」

「ちょ！ラッキー！オレは言っておくが鈍感なんかじゃねえぞ！」

「姉ちゃんが一向に離れたくないのを見て、何も思わない時点で

鈍感だよ…」

エルフマンが何か訳の分からない事を言っていた。

結局、ミラの家で夕飯まで食べる事になってしまった…

ラッキーが大量に食べるので、ミラはたくさん作った。

そういえば、料理出来たんだ…

その後、夕飯を食い終わって…ラッキーは食いすぎて寝ていたが…お別れをし、ミラの家を後にした。

見ると、もう夕焼けの時間だった…。

そういえば、ナツの事が少し気になった…

そこで『しんそく神速』を使って、ナツの向かって行った方向に移動した。

たどり着くと、夕陽がはっきりと見える丘の上だった。すげえ良い景色だ…

その丘の上には、藁でできたかまくらがあり、その前にナツとハッピーがいた。

良く見ると、ナツの前には墓があった…ナツが作ったのだろうか？

そのとき、話し声が聞こえてきた。

「ナツウ…大聖堂の方に墓があるのに、なんでここにも作るの？」  
ハッピーの声だ。

それにナツが答えた。

「リサーナ…この場所から見る夕陽が大好きだったんだ…だから…  
…リサーナが

いつでも夕陽を見れるように…ここにも作るんだ…」

その声は、涙声だった…。

ここは、どうやらナツとリサーナの思い出の場所らしい…

オレはナツの所に歩み寄った。

「ナツ…」

声をかけると、ナツとハッピーが振り向いてきた。

二人とも涙で顔がグシャグシャだな…

「なんて顔してやがる、2人共…」

思わず笑みをこぼしてしまった。

それにつられるようにナツも少しずつ笑顔になっていった。

「さあ、そろそろ、帰るぞ…」

その後…ナツとハッピーと共に丘を下りながら、あの場所の事を聞いた。

どうやら、ナツがハッピーの卵を見つけて、リサーナと共に、その卵を

温めていた場所らしい。

その思い出の場所に墓作るなんて……意外とやるじゃねえか……ナツ……

そんなこんなで、ギルドに戻って行った。

ギルドに戻ると「鈍感、鈍感」と、ほぼ全員が言ったが……

サツパリ分からなかった……

## 遺体の無い葬式（後書き）

さて、今回は短くて済みません…

ここで、主人公のディオスが鈍感…という設定にしました。

次はようやく原作へ行きます。

ルーシィあたりかな？

そういえば、リサーナは死んでませんでしたねw

原作へ…ルーシイ登場！（前書き）

さて、遺体の無い葬式から2年後…  
ついに原作へ戻ってきました！

今回、ディオスは登場しません。  
設定はクエストに行っているため…

原作へ…ルーシー登場！

side ナツ

ここは、ハルジオンの街…列車内

「あ…あの…お客様……」

乗務員が1人気分の悪そうな少年を発見して声をかけた。

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

ものすごくつらそうだ。桜色の髪、鱗のようなマフラー…

16歳になったナツだ。

「だ…大丈夫ですか？」

駅員の問いに青いネコのような動物が答えた。

ハッピーだ。

「あい。いつもの事なので」

そう。ナツは乗り物に極端に弱く、すぐ酔ってしまふ。

「無理…列車には二度と乗らん…つぶ…」

いっつも、同じ事を言ってるが、ちゃんと乗っている。



不思議だ。

「情報が確かなら、この街に『サラマンダー火竜』がいるハズだよ。行こ！」

ハッピーが列車から降りながら言つと…

「ちょ…ちょっと休ませて…」

とナツが答えた。

ハッピーは降りた後、街を見渡していると、列車が音を立てて出発した。

「あ」

ガタン…ゴトンと言いながら列車はナツを乗せて出発する。

それに気づいたハッピーだったが、時すでに遅く…

「出発しちゃった…」

遠くの方から「た〜す〜け〜て〜」とナツの悲鳴が  
むなしく響いた。

side エンド

side ????

「ええーっ!!?!?この街って魔法屋1軒しかないの?」

あるお店から、少女の音が響き渡った。

「ええ…元々、魔法より漁業が盛んな街ですからね」

店主らしき人の声も聞こえた。

「街の者も魔法を使えるのは1割もいませんで…この店も、ほぼ、旅の魔導士専門店ですわ」

店主の言うには、そういう事らしい。

ここまで来たのに…

「あーあ…無駄足だったかしらねえ…」

その様子を見て、店主は負けじと…

「まあまあ、そう言わずに…見てってくださいな!新商品だってちゃんと揃ってますよ!」

と言うと、何かを取りだした。

本のような…なんかよくわからない物だった。

「女の子に人気なのは…この『色替<sup>カレース</sup>』の魔法かな…。その日の気分に合わせて…」

「服の色をチェンジくってね」

すると、店主の服の色が変わった。

というか、持ってるし…

私は強力な『ゲート門の鍵』が欲しいんだよなあ……

と思っていた時、鍵を発見した。

「あ！ホワイト白い子犬ドギー!!」

「そんなの全然強力じゃないじゃん」

店主が呆れていたが、私はこの鍵を探していた。

そして、値段を聞いてみた。

「おいくらかしら？」

「2万」

即答で返ってきた。

聞き間違いだよな…

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから、2万」

また即答……仕方が無い……ここは私のニスバディと美貌を使って……  
お色気作戦!!

「本当はおいくらかしら？ステキなおじさま」

棒読みだけど、決まった!!!!!!これで半額決定よ!!

「では、1万9000Jで……」

「ありがとう!!」

もはや、店主の言った金額など耳に入らず、1万9000J払って、  
外に出た……。

そして、そこで気付いた。

「私のお色気って1000Jか……!!」

近くにあった看板を蹴っ飛ばして気分を晴らした。

すると、周りが騒がしくなってきた。

「何事かしら？」

思っていると、横を猛スピードで女の大群が通って行った。

「この街に有名な魔導士様が来てるんですって!!」

「<sup>サラマンダー</sup>火竜様よーっ！ーっ！ーっ！ーっ！」

へえ…どっかで聞いたことがあるような…って

「サラマンダー…！？あ…あの、店じゃ買えない『火の魔法』を操るっていう…」

この街にいるの…！？？」

気分が高揚してきた。

「か…カツコいいのかしら…」

と、スタスタ、気づかぬ間に女の大群の中へ向かって行った。

そして、集団の一番前に出ると、男の姿が見えた。

その途端、なぜか胸がドキドキし始めた。

「(な…な…なに？このドキドキは…！？)」

胸のドキドキが辺りに聞こえそうだった。

「(ちょ…ちょっと…！あたしってばどうしちゃったのよ…！)」

その時、男がコチラに笑みをを見せてきた。

その途端、胸がキュンとしてしまった。

「(は…は…！…！…！)」

ダメ……

「（これって…もしかして…あたし…）」

そう思ってる時、勝手に体がふらっと動いてしまった。

と…その時、群衆をかき分けて、桜色の髪をした少年が前に出てきた。

「イグニール！！！！」

出てきたと同時に誰かの名前を言った。

その途端、目からハートが落ちた。

「（分かった…！こいつの魔法！！）」

なぜ、こんなに心が惹かれてしまったのか、ようやく分かった。

急に出てきた少年に感謝だ。

side エンド

side ナツ

「サラマンダー火竜ってイグニールの事だよなあ、ハッピー」

「あい！火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「だよな！！」

列車に2回乗る地獄を味わった後は、ハラが減ってきた…

だが、金は無い…

しかし、ようやく火竜に会えるとなると気分が高まってきた。

「やっと見つけた！ちょっと元気なってきたぞ！」

「あい！」

ハッピーも同調する。

その時、前方に女の集団を見つけた。

「きゃー！サラマンダー様！」

と聞こえてきた。これって…

「噂をすればなんたらってやつだー！」

「あい！！」

と、オレとハッピーは集団に向かって行った。

集団をかき分けて、前へ前へ進む。

「イグニール…イグニール！」

周りの女に構ってられなかったので、強引に押しつけた。

そして、一番前に来ると…

「イグニール!!!」

やっと会えた…イグニール…ル？

…前には全く知らない男がいた。

「誰だお前？」

試しに聞いてみた。

すると、男はすんげえ落ちこんだ顔をした。

しかし、すぐにイケ・メン!…みたいな顔になると…

「サラマンドーと言えば…わかるかね？」

と語ってきたが、オレとハッピーはすでに蚊帳かやの外。

ため息をつきながら去っていた。

「はやつ!」

と男の驚愕の声が聞こえてきたが、スルーした…



と、その時、マフラーを誰かに掴まれた。

見ると、先ほどの集団の中にいた女が数人マフラーを引っ張って集団の中に逆戻りした。

「な、なんだ？オイ」

すると、女たちは顔をムン！と近付け、

「ちよつと！アンタ失礼じゃない！？」

「そうよ！サラマンダー様はすつごい魔導士なのよ！！」

「あやまりなさいよ！」

と口々に言ってきた…

ある意味…怖かった。

その時、先ほどの知らん男が声を上げた。

「まあまあ、その辺にしておきたまえ…彼とて悪気があった

訳じゃないんだからね」

と、その途端、女達の目が再びハートになった。

「やさし〜！」

「あ〜ん」

なんなんだ？コイツら？

その時、男がサインボードに何かを書きあげ、渡してきた。

「僕のサインだ。友達に自慢するといい」

いやいや…そんなもん渡されても…正直…

「いらん」

……口に出してしまった……

その途端、また女の顔が変わった。

「……………あ〜ん!?」「……………」

バゴツ!!

そして…集団の外に弾き飛ばされた。

「うごっ!」

ズシャッと地面を転がる。

そこにハッピーも近寄ってきた。

「人違いだったね」

そのようだ……

集団の方を見ると、男は何かを語り終わって…

「レッド…カーペット!」

と指を鳴らした。

すると、紫の炎が男の足元から湧きでた。

男はその炎に乗ると、どこかへ去って行った。

その時、声が聞こえた。

「夜は船上でパーティをやるよ。みんな参加してくれるよね」

そんな事を言っていた。

さっぱりわけわからなかった…

「なんだアイツは?」

そう口にした時、後ろから声が聞こえた。

「本当いけすかないわよね」

振り向くと、金髪で薄着をしている少女がいた。

「さっきはありがとね」

すると、笑顔でお礼を言ってきた。

……なにが、ありがとうなんだ？

その後、『ルーシィ』と名乗ったその女は

お礼としてご飯をおごってくれろといっことば

一緒に飲食店へ向かった。

side エンド

side ルーシィ

私は今、あのいけすかない男の魔法を解いてくれた

少年+ネコにご飯をおごっていた…が…その食いつぷりがすごかった。

ガツガツ！ボリボリ！ゴリゴリ！モグモグ！

ゴキユゴキユ！ズビビビ！ガバババ！グボバボ！

もうちょっと落ち着いて食いなさいよ…というか

なんか飛んできてるし……それも

あの時のお色気代パーだし…

すると、少し落ち着いて食い始めた少年に先ほどの

男の事を話す事にした。

「あのサラマンダーって男、『魅了<sup>チャーム</sup>』っていう魔法を使ってたの  
この魔法は人々の心を術者に引きつける魔法なのね。…何年か前に  
発売が禁止

されてるんだけど……あんな魔法で女の子の気を引こうだなんて、  
やらしい  
奴よね」

それと同時に何で私がお礼としておごっているのかについても話した。

「あたしは、アンタたちが飛び込んできたおかげでチャームが解けたって訳」

すると「なぶぼ」と返してきた。食いながら話さないでよ…

あ、そういえば、ちゃんとした自己紹介してなかったのに気付いた。

「こつ見えて、一応、魔導士なんだー、あたし」

「ほぼお…」

「でも、まだギルドには入ってないんだけどね…」

と、そこで気付いた。魔導士でない子にギルドって言うても分からないか…

そこで説明することにした。

「あ、ギルドってのはね…魔導士たちの集まる組合で、魔導士たちに仕事や情報を仲介してくれる所なの！魔導士って、ギルドで働かないと一人前って言えないものなのよ！！」

「ふが…」

飲み込んでからしゃべってよね…

まあ、そんなことより話を続けることにした。

「でもね！でもね！！ギルドってのは世界中にいっぱいあって！！やっぱり人気のあるギルドはそれなりに入るのは厳しいらしいのね！！」

どうやら、すでに独り言に近くなっていたが、私は気づいてなかった…

そして、まだ話し続けていた。

「あたしの入りたいトコはね！もう、すごい魔導士がたくさん集まる所で！」

ああ……どーしよ！！入りたいんだけど厳しいんだろーなあ……」

「いあ…」ボソツ…

「あー、ゴメンねえ！魔導士の世界の話なんて分かんないよねー！！」

「でも、絶対そのギルド入るんだあ…あそこなら大きな仕事たくさん  
もらえそうだもん…」

そして、話終わった…結局、独り言に近くなっていたのに私は最後まで

気が付かなかった。

「ほ…ほおか…」

「よく、しゃべるね…」

少年と猫はすでに呆れた顔で見てた…

「あ！そういうば、君達の名前聞いてなかったね…何て言うの？」

「ああ…オレはナツ…ナツ・ドラグニルってんだ…」

「ボクはハッピー！」

ナツにハッピーか…覚えやすいし、いい名前だなあ

「ナツと…ハッピーね。…そういうば、あんたたちは誰か探してみたいだけど………」

その質問にハッピーが答えた。

「あい、イグニール！」

イグニール?…変わった名前ね…

「サラマンダーが、この街に来るって聞いたから来てみたはいいけど…」

別人だったな…」

「サラマンダーって見た目じゃなかったんだね」

「てっきり、イグニールかと思ったのにな…」

何やら、訳の分からない話をしている……

て、…え?…

「見た目がサラマンダー……って、どうなのよ……人間として……」  
声に出ていた…

すると、ナツが答えた…それも衝撃的な答えを…

「ん?人間じゃねえよ…イグニールは本物の竜だ」

……

「はあ…?」

「あい!本物のドラゴンだよ!」

「はあ!?!」



ドラゴン…って、あのトカゲみたいなのに翼があつて、炎吹く  
生き物のことあ！？

というか、そんなこと、どうでもいい！…それ以前に…

「そんなのが街中にいるはず無いでしょー！！」

ドラゴンが街中にいたら、大騒ぎだよ！

「ああ（ああ　ああ　ああ　ああ）！！！！！！」

ナツとハッピーは雷に打たれたかのような顔になって

驚きの声を上げた　ってえ…

「オイイ！今、気付いたって顔すんなあ！！」

ツッコんだ…。

って…そんなことより、もうこんな時間だ…そろそろ行かなきゃ…

私は、お金をテーブルの上に置いて、席を立った。

「じゃあ、あたしはそろそろ行くけど…ゆっくり食べなよね」

いまだに、ドラゴンが街中にいるはずが無いという事実を知って、

啞然としているナツとハッピーを置いて、店の扉の前まで行った…

「ありがとうございましたあ…」

とメイドの服を着た女性が、声を掛けてきた…途端…

「ヴァ…」

あたしの後ろを見て、絶句した。

その理由を確かめるため、私も振り向いた…そして

それを見た途端…

「ヴァ…」

絶句した。

「ごちそうさまでした…!!」

「でした…!!」

ナツとハッピーが床に土下座してお礼を言ってきた。

まあ、お礼を言うのはいいけど…

「やめて…!! 恥ずかしいから…!!」

…こっちの身も考えてほしい…

「い…いいのよ…あたしも助けてもらったし…おあいごでしょ？ね  
」？」

私は適当に言っただけで去ろうとした…が…

「あまり助けたつもりが無いトコがなんと…」

「あい、はがゆい…」

顔を上げて、何かブツブツ言っている…

「はあ…」

私は、ため息をついた…  
と、その時、ナツが何か閃いたようにポンと手をたたき立ちあがった。

「そっだー!!」

すると、近づき、何かを手渡してきた。

…あの時のサラマンダーのサインだ…

まさか……………

「じねやるよ」

い…いやいや…そんなもん…

「いらんわ…!」

「この子は何回シッコめばいいのかわかんない…」

そして…そんなこんなで、店を出た後、私は公園のベンチに座った。

そして、カバンから雑誌を取りだして読む…

あ、そうそう。この雑誌は『週刊ソーサリー』と言う週刊雑誌で、魔法専門誌なの。

その時、何かの記事を発見した。

「あゝらら…また、フェアリーテイルが問題起こしたの？」

それは、私の入りたいギルド『フェアリーテイル』の記事だった。

フェアリーテイルは何かと問題を起こし、この雑誌に載るのはいつものことだ。

「なになに？デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅…」

それを読んだ途端、吹いた。

「あははは！やりすぎー！！」

足をバタバタさせて、笑う。

そして、そのまま寝ながら、雑誌をめくる…

すると、今度はグラビアだ。

「ああ！グラビア、ミラジエーンなんだ」

ミラジエーン…フェアリーテイルの看板娘だ。

すごくスタイル良くて、かわいい顔してるなあ…と言っか…

「こんな人でもメチャクチャったりするのかしら」

少し頭の中で想像してみた…途端、吹いた。

「…てか、どうしたら『フェアリーテイル』に入れるんだろ…

やっぱり強い魔法覚えないとダメかなあ…

面接とかあるのかしら…」

雑誌を閉じて、考えてみると、いろいろ問題が上がってくる…

だけど…やっぱり…

「魔導士ギルド『フェアリーテイル』…最高にカッコいいなあ！」

そんなことを言っていると、後ろの茂みから何者かの声が聞こえた…

「へえ、君、フェアリーテイルに入りたいのか」

…この声…どこかで聞いたことあるような…

そして、声の主が茂みから出て来た。

やっぱり…こいつ…

「サラマンダー!?!」

先ほど、チャームで女の子達を誘惑してた男だった…

「いや、探したよ…君の様な美しい女性を、ぜひ、我が船上パーティーに招待したくてね…」

出てくると、同時に変なことを言い始めた…

そして、サラマンダーは右手を顔の前に出す…

でも…残念でした。

「チャームなら効かないわよ!その魔法の弱点は『理解』!それを知っている人には魔法は効かない!」

事実を突き付けた。

だが、サラマンダーは、あまり驚かなかった。

「やっぱりね…目が合った瞬間に魔導士だと思ったよ…いいんだ、パーティーにさえ来てくれれば」

なるほど…私が魔導士だって気づいてたの…

というか、そんなことより…

「行くわけ無いでしょ!アンタみたいな、えげつない男のパーティーなんて」

そう言った途端、サラマンダーは見えない矢に貫かれたかのような顔になった…

「え…えげつない僕!？」

自分で気づいてないの…？

「チャームよ!そこまでして騒がれたい訳？」

そこで、男がわかるように説明した。

「あんなの、ただのセレモニーじゃないか…

僕はパーティの間、セレブな気分でいただけさ…」

何て理由…そんなことでチャームを使うなんて…

「有名な魔導士とは思えない、おバカさんね」

そう言つて、私は去ろうとすると、サラマンダーは追いかけてきた。

「待ってよ!!!…君…たしか、フェアリーテイルに入りたいたんだろ？」

フェアリーテイル…そう聞いた途端、足が止まった

そして、振り向いてみる…

「フェアリーテイルのサラマンダー…って、聞いたこと無い？」

そして、サラマンダーはとんでもない事を言ってきた。

フェアリーテイルのサラマンダー…たしかに聞いたこと…

「ある！」

もしかして、この男…

「アンタ！フェアリーテイルの魔導士だったの！？」

恐る恐る聞いてみる…

そして、サラマンダーは答えた…

「そうだよ。入りたいなら、マスターに話を通してあげるよ」

マスターに話を通す…それを聞いた途端、気分が高揚した。

「素敵なパーティになりそうね」

そして、私は知らぬ間にサラマンダーに近づいていた…

「わ……わかりやすい性格してるね…君…」

少し、引かれた…

そんなことより、重要な事を聞いてみる…

「ほ……本当に、あたし、フェアリーテイルに入れるの！？」

嬉しい答えが返ってきた。



「もちろん。そのかわり、チャームの事は黙っといてね」  
フェアリーテイルに入れるなら、そんなことぐらい…

「はいはい!!」

快く了承していた…

すると、サラマンダーは足元から炎を出して、去ろうとした。

「それじゃ、パーティで会おう…」

そして、飛び去って行った。

「了解であります!!」

敬礼をとっていた…

しばらく、そのまま、ポっつとしているとハッと気づいた。

「疑似チャームしてたわ!!」

自分で言っただけなんだが、疑似チャームって何…?

まあ、いいや。そんなことよりも…

「フェアリーテイルに入れるんだ!! やったー!!」

あ、でも、まだ入ったって決まったわけじゃなかった…

入るまでは…

「あの男に愛想よくしとかないとね…」

そして、ひそかに企む私だった。

side エンド

そして、夜になった。

side ナツ

「ぷはぁー！食った食ったぁ！」

「あい」

あの、よくしゃべる少女…ルーシィにおごってもらい、  
腹いっぱい食べた。ハッピーも満足そうだ。

そして、今は、街の高台を歩いている。

その時、海の方に船が見えた。

それを見付けるとハッピーが声を上げた。

「そいや、サラマンダーが船上パーティーやるって…あの船かな」

「うぶ…気持ちワリ…」

オレはそれどころじゃなかった…

「思い出しただけで酔うのやめようよ…」

ハッピーにツッコまれた。

その時、横の方で3人くらいの女性の話し声が聞こえた。

「見て見て〜！！あの船よ、サラマンダー様の船！」

あ〜ん…私もパーティー行きたかったなあ…」

「サラマンダー？」

「知らないの？今、この街に来てる、すごい魔導士なのよ」

「あの有名なフェアリーテイルの魔導士なんだって」

フェアリーテイル…それを聞いた途端にピクツと動いた…

「…フェアリーテイル？」

そして、女から目を離して船を見る…酔った…

「うぶ…」

船から目を離した…。

そんなことより…

「フェアリーテイル…」

何かが、引つかかった…

side エンド

side ルーシィ

夜になり、私はサラマンダーの船上パーティーに来ていた。

男に名前を聞かれ、ルーシィと答える…

「ルーシィちゃんか…いい名前だね」

ちゃん付けしないでくれる？

とりあえず、ニコニコしながら

「ごもも」

と答える。

「…まずは、とりあえず乾杯といこう…」

サラマンダーは立ちあがって、指を鳴らした。

すると、グラスに入ってるワインが1粒1粒浮き上がった…

それが、ゆっくりと私の方に飛んでくる…

「さあ…口を開けてごらん…ゆっくりと葡萄酒の宝石が入ってくるよ…」

いやいや…そんなことしなくても自分で飲めるし…それも…

「（うざー！ー！ー！）」

だが、フェアリーテイルに入るため…

「（ここはガマンよ！ガマン、ガマン…）」

そして、口を開けて、飲もうとした時…

気が付いた。

男の右手の中指にある指輪に…

ピシャッと飛んでくるワインを手ではじいて、サラマンダーを睨む…

「どづいづつもり？」

男は、知らぬふりをしてるが、騙されるものか。

「これは、睡眠の魔法…『スリープ』よね」



それ以前に…

「ボスコ…って…ちょっと！！フェアリーテイルは！！？」

その質問に最悪の答えが返ってきた…

「あきらめな…アンタも今からオレたちの商品だ…」

「そんな…！じゃあ、この子達は…」

男達の抱えてる女の子達を見る…

すると、1人が声を上げた。

「へへへ、さすがサラマンダーさん…今日も大漁ですな…」

…そういうことね…こうなったら！

私は腰から鍵を取りだした…

「この…！」

だが、少し遅かった…サラマンダーが先に魔法を使って、

鍵を奪われた…

「ふーん…<sup>グート</sup>門の鍵…星霊魔導士か…だが、これは  
契約者以外は使えん…つまり、オレには必要ねえって事さ…」

そう言うと、サラマンダーは鍵を海へと捨てた。

絶体絶命だった…

「（なんなのよコイツ…こんな事をする奴が…

こんな…これが…フェアリーテイルの魔導士か！！！！）」

憧れていたギルドの1人のコイツを見て…私は涙があふれそうだった…

「（魔法を悪用して…人をだまして…）最低の魔導士じゃない…」

そして、ついに、涙があふれてしまった…

その途端…

バキィッ！！！！

サラマンダーの上の屋根から何者かが突っ込んで来た。

桜色の髪…鱗のようなマフラー…

「ナツ！」

救世主が来てくれた…と思つて、涙を拭って呼ぶ。

その時…ナツの顔色がおかしくなった。

「おぶ…この船揺れてる…」

…酔ったようだ…って…



「えーーーーーっ!!!!?カッ」わるーーーーー!!!!」

その様子を見て、呆れた…。

その時…屋根の上から声が聞こえた。

「ルーシィ、こんなところで何してるの?」

上を見ると……………

ネコが飛んでいた。

青い色をしたネコ…

「ハッピー!?!」

「騙されたのよ!フェアリーテイルに入れてくれるって……  
ってどうかアンタ、羽なんかあったっけ?」

「細かい話は後だよ!いくよ!!!」

サラマンダー達は突然の出来事に啞然としていたが、

ようやく気が付いた。

ハッピーは尻尾を私の体に巻くと、飛んで、船の外に出た。

あれ?でもナツたちは?

その時、サラマンダーが部下に命令してるのが聞こえた。

「チツ！追うぞ！評議会に通報されたら、やっかいだ！」

まあ、そんなのはほっといて…

「ちょっと…ナツは!？」

「2人は無理！」

「あらまあ………」

即答で返ってきた…。

その時、サラマンダーが魔法を唱えた。

「逃がすかあ！プロミネンス・ウィップ……！」

そして、無数の炎が向かってきた。

それを、ハッピーはグルグル回りながら避ける…だけど、私は振り回される…

「きゃああああああああああ！……！」

そして、炎は最後に1つに集まって…

ドーン……!

花火が上がった。………なんで、花火？

「たーまやー！」

なんか、そんな声が聞こえるし…

「チイツ！すばしっこいネコめ！！」

サラマンドーが舌打ちした時、その後ろから声が聞こえた。

「おい……ハア…ハア…」

酔っているナツだ…

「ナツや女の子達を助けなきゃ！！」

ハッピーに言ってみる…それと同時にハッピーも何か言ってきた。

「ルーシィ、聞いて……」

「なによ、こんな時に！！」

「変身解けた」

即答で返ってきた…それも最悪の答えが…

その時、ハッピーの羽が消えた。

……………この……………

「クソネコー！！」

「あー」

そして、私とハッピーは海へ真つ逆さま…

ドパーン…

海へ入ると、私は泳いで、ある物を探した。

ハッピーは…落ちると、そのまま岩壁へ頭を打った。

まあ、それはおいといて……

すると、岩の方に光っている物体を発見した。

先ほど、サラマンダーが投げ捨てた私の鍵だ。

「（あった！）」

私を鍵を見付けた時…船の上では…

「仕方がない…先にボスコへ急ぐか…」

サラマンダーは、どうやらあきらめて、ボスコへ行こうとした。

その時、部下にボコボコにされていたナツは振り下ろされる足を受け止めた。

「フェアリー…テイル…おまえが……」

ナツがフラつきながら立ちあがった。

私はと言うと、鍵を拾うと、海の上へ出た。

「ぷは！」

「ぷかー……」

ハッピーは…気絶しながら浮いてきた…

まあ、それよりも…

「行くわよお…」

鍵を1つ取った。

「開け！宝瓶宮ほうへいきやうの扉！アクエリアス！！」

海に鍵を突き立てて、回すと魔法陣が生まれ、

そこから人魚らしき者が出て来た。

その時、目の覚めたハッピーが声を上げた。

「魚ー！……！！」

「違うから」

ぺシッとハッピーにツッコむ…

「すごいね」

「あたしは『星霊魔導士』よ。門ゲートの鍵を使って、

異界の星霊を呼べるの」

ハッピーの称賛の言葉に返してから、

アクエリアスに命令した。

「さあ、アクエリアス！あなたの力で船を岸まで押し戻して！！」

「ちっ……」

……

「今、「ちっ」って言ったかしらアンター！！ねえ！？」

「そんなトコ、くいつかなくていいよお……」

アクエリアスに文句を言っていると、ハッピーにツッコまれた。

「うるさい小娘だ……」

アクエリアスは声を上げながら、波を起こし始めた。

「1つ言っておく……今度、鍵を落としたら……殺す」

「「「じめんなさい……」」」

アクエリアスに、なぜかハッピーまで一緒に謝った。

その時……

「オラア！！」

女性とは思えない声を上げて、アクエリアスが大波を起こした。

その大波は、船を港まで押し戻した。

…私まで巻き添えにして…

「あたしまで一緒に流さないでよー！！」

そのまま波に流されて、船と一緒に港まで押し戻された。

港では、すでに船が突っ込んできた事で、やじ馬が出来ていた。

「な…なんだ！？」

「港に船が突っ込んで来たぞ！？」

すみません…私の仕業です…

というか、その前にい…

「アンタ、何考えてんのよ！！あたしまで一緒に流す！？普通！？」

アクエリアスに文句を言った。

そして、アクエリアスは首を振りながら答えた…

「不覚…ついでに船まで流してしまった…」

ははあ…なるほどお…つまり…

「あたしを狙ってたのかー!!!」

この星霊の身勝手さには、山ほど文句を言いたい…

その時、アクエリアスが水になって消え始めた。

「しばらく呼ぶな…彼氏と1週間、旅行に行く…彼氏とな」

「2回言うな!!!」

最後まで嫌な奴だ…

つて、そんなことより、ナツが心配だ…

私は船の所に行き、声を上げた。

「ナツー!!!」

そして、船の上に立つナツの姿を発見した…その途端、

ナツが放っている気迫に少し怖気づいた…。

「お前が、フェアリーテイルの魔導士か…」

ナツがサラマンドーに声を上げた。

「それがどうした!!!…おい!やっちまえ!!!」



サラマンダーはそれに答えると、部下達に命令した。

ところが、ナツは、そんなのに気にせず、マントを上着を脱ぎだした。

「よおく、ツラ見せる…」

ナツが声を上げると、サラマンダーは邪悪な笑みをこぼした。

でも、部下の奴等がナツに向かってる…危ない！

「ナツ!!」

心配して声を上げると、肩に乗っていたハッピーが声を上げた。

「大丈夫…言いそびれたけど、ナツも魔導士だから」

「え!!!!????」

衝撃の答えに、驚愕の声をもらした。

その時……部下がナツに掴みかかった…

バキィッ!!!!

だが、ナツはそれを片手で薙ぎ払った。

「オレはフェアリーテイルのナツだ!!」

おめえなんか見た事ねえ!!」

「な!!」

「え!？」

ナツの右肩にある紋章…何度も見た憧れのギルドの紋章…

『フェアリーテイルの紋章』…

「フェアリーテイル!?!…ナツがフェアリーテイルの魔導士!?!?!?」

その事実、私は絶句した。

その時、サラマンダーの部下の1人が声を上げた。

「あ…あの紋章…本物だぜ、ボラさん!」

…ボラ…?どつかで聞いたことあるような…

「バ…バカ!!その名で呼ぶな!!」

その『ボラ』という名前について、ハッピーが語った…。

「ボラ…プロミネンス紅天のボラ』…数年前に、魔導士ギルド

『タイタン巨人の鼻』…ってギルドから追放された奴だね…」

…そつだ!確か、魔法で盗みを繰り返して…

その時、ナツが声を上げた。

「おめえが悪党だろうが、善人だろうが、知った事じゃねえが…  
フェアリーテイルを騙るかたの許さねえ!!」

ギリッと歯軋りをし、完全にキレている…

だが、ボラと言う男はナツの気迫等、全然気にせず、魔法を唱えた。

「だったら、どうするよ、ガキが！！？プロミネンス・パイファア  
！！！！」

体から、ナツに向けて炎を竜巻のように出した。

ナツは、それをまともに喰らった。…なぜ避けないの！？

「ナツ！！」

あわてて駆け寄ろうとした時、ハッピーに静止された。

なんで止めるの！？

と、その時、悲鳴が聞こえた…見ると、騙された女の子達が船から  
逃げてるところだった。

ボラの魔法により、船の上では炎が上がっていた。

それを見ながら、ボラが声を上げた。

「でかい口たたく奴ほど、ろくなモンじゃねえ…」

そう言って、立ち去ろうとした時、炎の中から声が上がった。

「まずい…」

「なああっ!?!?」

ボラが驚いて振り向く…、そして炎の中心を、よく見ると…

「何だコレア…おめえ、本当に火の魔導士か？  
こんなまずい『火』は初めて食った…」

と、『炎を食べている』ナツを発見した…

その途端…

「なああああっ!?!?」

「はあああああっ!?!?」

ボラ達と私は驚愕して目を大きく見開いた。

そして、炎はどんどん、ナツの口に吸い込まれていき…消えた。

ナツが声を上げた。

「ふうー…ごちそうさまでした ゲプツ…」

その途端、ボラが変な声を上げた。

「な…ななななな、何だコイツは…!?!?」

当たり前だ…火を食べる魔導士など見た事が無い。

その時、ハッピーが声を上げた。

「ナツには火は効かないよ…」

いや…見ればわかるけど…でも

「こんな魔法見た事無い!!」

今まで、いろんな魔導士を見て来たが、こんな初めて見た。

そして、ナツはと言うと…

「食ったら、力が湧いてきたあ…」

と、なんかおかしな事を言っていた…。

すると、ナツは両手の拳を合わせ魔法陣を出した。

「いくぞおおお！火竜の咆哮!!」

と、息を思い切り吸い込んだ。

なにをするつもりなの!?

すると、ナツは両手を筒のようにして、口の前に持っていく…

特大の炎を吹いた。

ドゴゴゴオオオオオオツ!!!!!!

そして…港の一部で爆発が起きた。

爆風がここまで届いた…

そして、煙が消えると、ボラの部下達はほとんど全滅していた。

ボラ本人は炎に乗って無事だった。

その時、部下の1人が声を上げた。

「ボラさん！オレア、コイツ、見た事があるぞ…」

「桜色の髪に…鱗みてえなマフラー…間違いねえ…こいつが本物の…」

私は知らぬ間に声を上げていた。

サラマンダー  
「火竜…」

そして、ナツは両手に炎を纏った…

「よく覚えておけよ…これが…フェアリーテイルの…魔導士だ…」

そして、ボラに向かって突っ込んでいく…

「ひいひい！！レッド・シャワー！！！！」

ボラは炎の弾をガトリングのように出し、応戦するが、全てかわされた。

「おおおらああ！！！！」

ドゴオツ！！

そして、ナツは飛び上がると、空中にいるボラを殴り飛ばした。

ボラは宙を舞うと、高台のほうまで吹っ飛んだ。

私は、そんな戦いを見て、声を上げた…

「火を食べたり、火で殴ったり…：… 本当に、コレ魔法なの！？」

それにハッピーが答えた。

「竜の肺は焰を吹き…：竜の鱗は焰を溶かし…：竜の爪は焰を纏う…  
これは自らの体質を竜の体質へと変える、エンシェントスペル…  
つまり、『太古の魔法』！！！！」

「なにそれ！？」

さらに聞くと、衝撃的な事を言った…。

「元々は『竜迎撃用』の魔法だからね」

「…………… あらま……………」

そんな魔法、人間に使っていいのかしら？  
そして、また、ボラとナツの戦いを見る…

空中に再びあがったボラは大きく構えた…

「ヘル…プロミネンス…!!」

そして、特大の炎の光線を放ち、街を横一直線に薙いだ。

ドガガガアアン…!!…!!

そして、爆発が起きた。

だが、ナツはその爆発の中…普通に立っていた。

「ちくしょー…!!」

今度は、特大の炎の球を作って、放り投げた。

だが、それはナツに簡単に受け止められ、食われた。

食い終わると、ナツが声を上げた。

「これなら、そこそこ食えるなあ…オイ、テメエ…  
ブスブスの燻製くんせいにしてやるぜ…!!」

「燻製いやん…!!」

ボラが乙女化した…キモい…

そして、ナツは『火竜の咆哮』の時と同じように、

両手の拳を合わせ魔法陣を出した。



「ぶつ 飛べ！火竜の…鉄拳！！」

叫ぶと、ナツは空中のボラに突っ込んで行った。

その右手に、炎が纏う…

そして…

「ひあああ！！」

ドゴオオツ！！

ボラの頬にお見舞いした。

ボラはそのまま、街の中を吹っ飛び…

「グバボババボオツバイヤ~~~~！！」

ゴ~~~~ン

教会の鐘を鳴らした。

その時、ハッピーが声を上げた。

「ナツ…燻製は『炎』じゃなくて『煙』で出来るんだよ？」

「ごもつともです……」

さて、それはさておいて……滅竜魔法かあ…

「すごいなあ…すごいけど…」

声を上げながら、辺りを見渡す……そこには…

ボラとナツの激闘…によって廃墟と化した港があった。

「やりすぎよお！…！」

「あい！」

「あい、じゃない…！」

ハッピーの呑気な返事にツッコんだ。

その時、ようやく、軍隊が到着した…

「軍隊…あつ！」

その時…ナツに腕を掴まれ…そのまま振り回された。

「やべえ！逃げんぞ…！」

「なんで私まで…！？」

その質問にナツは走りながら答えた。

その答えは最高のものだった。

「だって、オレたちのギルド入りてえんだろ？……来いよ…！」

それを聞いた途端、私の気分は高揚した。

「うんー!」

そして、ナツの手を離し、私もナツを追って走り出した…

side エンド

さて、ナツに連れられて、マグノリアという街に着いた…

そして、マグノリアの一番奥にあるギルドの前まで来ました

そして、その門には『FAIRY TAIL』と書かれていた…

それを見たとき、実感した。ついに、私はフェアリーテイルに来たんだ…と

どんな人たちが待っているのか楽しみです!

原作へ…ルーシイ登場！（後書き）

さて、長くなってしまいましたすみません。

え？主人公が登場しないでどうする！？…て？

……………ごめんなさい……………

次は、ルーシイがフェアリーテイルに正式に加入するお話です。  
マスター登場…らへんかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8326y/>

---

フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

2011年12月1日23時54分発行